
仮面ライダーW ~ another world story ~

亀鳥虎龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW \ another world story \

【Nコード】

N2193X

【作者名】

亀鳥虎龍

【あらすじ】

科学と魔術、そして怪異に神秘が取り巻く街『シメント神都』。この街には、あらゆる事件に遭遇する。そこにある喫茶店の二階にある事務所。名は『万時屋』と呼ばれ、様々な依頼や事件を解決している。これは、その事務所に所属する二人の青年の物語である。

プロローグ(前書き)

新連載しました。

プロローグ

今から一年前、一人の男がある組織との戦いに敗れ、命を落とした。

その弟子の少年は、彼が助けようとした青年共に脱出を試みたが、

「逃がさないわ」

一人の異形が立ちはだかる。

その時、青年がこう言った。

「魔術師と契約する覚悟、あるかい？」

「え……」

その言葉に、少年の下した決断とは、

「決まってるだろ、そんな事」

たった一つであった。

「地獄のそこから引き上げるまで、トコトン付き合ってやる！ そして…… 奴等の幻想をぶち殺す！」

科学と魔術、そして怪異に神秘が取り巻く街『シント神都』。

この街には、あらゆる事件に遭遇する。

そこにある喫茶店の二階にある事務所。

名は『万時屋』と呼ばれ、様々な依頼や事件を解決している。

そんなこの事務所には、二人の事務員が経営していた。

「行くぜ、相棒！」

「勿論！」

この二人を中心に、様々な事件が巻き起こるのであった。

「さあ、その幻想をぶち殺す！」

プロローグ（後書き）

次からは連続投稿です。

世界設定と人物設定（前書き）

キャラ設定です。

グダグダな部分もありますが……

世界設定と人物設定

この小説の世界

アビリティ
特殊者

この世界の能力者や魔術師を纏めた呼び名。
科学系なら『サイエンスアビリティ』、魔術系なら『マジックアビリティ』と呼ばれる。

それぞれ特性が異なり、生まれつきの者がいれば、一から習得する者もいる。

また、同じ能力でもランクが違う。

最低ランクはEで、最高ランクはS。

ガイアメモリ

『仮面ライダーW』に登場したアイテム。

本作でもキーアイテムとして登場する。

あらゆる話で登場する。

ドーパント

『仮面ライダーW』に登場する怪人。

オーメダル

『仮面ライダーOOO』で登場するアイテム。

（登場人物設定）

上条当麻

登場作品：とある魔術の禁書目録

年齢：18歳

能力：幻想殺し（イマジンプレイカー）

ランク：E

設定：この作品の主人公。

原作同様に様々なトラブルや不幸に巻き込まれる。

『幻想殺し（イマジンプレイカー）』によりあらゆる能力を無効化出来る。

メンバー内ではどっちかと言うと常識あり。

本作に合わせて年齢を少し上げている。

ユーノ・スクライア

登場作品：魔法少女リリカルなのは

年齢：23歳

能力：賢者 ワインスマン

ランク：S

設定：この作品のもう一人主人公。

あらゆる知識を持つ能力を持ってしまったためにある組織に拉致された経験がある。

上条の相棒兼彼の唯一の理解者。

柴馬アトリ

登場作品：アトリ抄

年齢：16歳

能力：髪刃 ヘアブレード

ランク：A

設定：スタイル抜群の少女。

しかし、かなりの大食い。

自らの髪を武器に変えることができるが、体力を激しく消耗するため、食事量が高い。

スカートがめくれても全く動じない。

ジライヤという小さな妖獣と過ごしている。

インデックス

登場作品：とある魔術の禁書目録

年齢：不明

能力：完全記憶

ランク：S

設定：上条と一緒にいるシスター。
魔術系特殊者の能力知識に詳しい。
かなりの大食いで、彼女とアトリの食費で赤字寸前である。

世界設定と人物設定（後書き）

『アトリ抄』知ってる人がいるかが心配だ。

上条

「だったら何故書く？」

第1話・その名はW/街の切り札(前書き)

第一話です。

第1話：その名はW／街の切り札

あらゆる出来事に魅入られるような街『神都^{シント}』。

この街にある喫茶店『翠屋』では、

「ですから、それは濡れ衣ですよ！」

「しかし犯人は此処の道場を名乗っているんだ！ どう見てもお前達は重要参考人だ！！」

喫茶店の看板娘・高町なのはは警察官と口論していた。

理由は、彼女の父親や兄が使っている剣術『小太刀御神二刀流』の使い手を名乗る人物『幻想殺し』が殺人事件を起こしていて、それ以来お客が一行に来なくなっただのである。

ある人物を除いては。

「すみませ〜ん。上条さんは、此処の甘味を食べに来たんですけど、良いでしょうか？」

一人の青年が頭を掻きながら問い出す。

名は上条当麻。

この『翠屋』の二階にある事務所『万時屋』を営んでいる。

たまたま『翠屋』の甘味を食べに来る事もある。

「あ、上条君。いらっしやい」

「あゝそれとお巡りさん。あんまり大声で怒鳴らない方が良いでしょう。状況次第では警察が喧嘩売ってるような感じだから」

「う……」

反論できない刑事・石垣筍は、『翠屋』を後にした。

注文したケーキを食しながら、上条はなのはにこう言った。

「アンタも大変だな。実家の剣術を悪用されるわ、警察に目を付けられるわ」

「ええ。誰だか知らないけど、ウチの剣術を悪用するなんて許せない」

悔やみながらもなのは拳を握った。

「絶対捕まえるわ『幻想殺し』」

上条もそれを黙って見ていた。

「それより上条君。 銀さんは帰ってこないけど？」

「……」

銀さんとは、万時屋の所長・坂田銀時のことである。

「ぎ……銀さんは今出張で帰ってこないんだ。 だから暫らくは会えない」

そう言っつて上条は、話を強引に戻す。

「そっか……ユーノ君の件もあるから……」

婚約者の名前を口に出しながら悔やむのは。

それを見るしか出来なかった。

事務所に戻った上条は、ある一人の青年に顔を向け、先ほどの話を
をする。

「だそうだ。いい加減に再会して、彼女を安心させたらどうなん
だ？」

「無理だ……彼女が僕の所為で傷付いてるなら、余計顔向け出来な
い」

青年は悲しそうな顔をするが、上条は頭を掻きながらこう言った。

「無理にとは言わねえけど、彼女の今の状況……お前も知ってるだ
ろ？」

「……………」

「まあ、お前が言いたいと思った時に言えば良い。それ以上は強
制しないぜ？」

上条はそのまま自室に戻るのであった。

その夜、一人の人間が殺害された。

さらにその血でこう書かれていた。

“小太刀御神二刀流『幻想殺し』見参”と……

「これで、我々の計画は……」

一人の男がそう言って呟いたのであった。

そして翌日、事件は起きた。

「高町恭也。 夕べの夜に起きた殺人事件について、話を聞きたい」

「な!？」

昨日の夜に起きた殺人事件の重要参考人にされたなのはの兄・恭也は、警察に同行されたのであった。

一方上条は、その事件の現場に向かっていた。

「此処か……」

現場には、被害者の返り血がベツトリと付着していた。

「相当、鋭利な刃物で裂かれたようだな……でも、いくら『小太刀御神二刀流』でも此処までやるか？」

顎に手を添えながら考える上条であったが、

「仕方無い、アイツに頼むか」

そう言つて上条はある人物に電話を掛けたのであった。

そしてその夜、

「……………」

なのはは、ポツンと椅子に座っていた。

「何で……………どうしてこうなったの？」

涙を浮かべながら小さく恋人の名前を呼ぶ。

「助けて……………ユーノ君」

しかし、その助けを呼ぶ声も届かなかった。

ダガンと扉を強引に開ける音がした。

「誰!？」

なのはが振り返ると、そこには複数の男達が現れ、その中心に小柄な初老の男と大柄な髭を生やした男が立っていた。

「初めましてお嬢さん」

「アナタは、確か不動産の!？」

「比留間喜兵衛と申します」

不気味な笑みを浮かべる比留間喜兵衛。

その顔を見た瞬間、なのははすぐに気付いた。

「まさか、アナタが!？」

「ほう、気付いたか。その通りだ」

「どうしてこんな事を!？」

なのはの問いに、喜兵衛は答えた。

「簡単だ、此処の土地は売り払えば大儲けになる。喫茶店などに使うのは勿体無いと判断したからだ」

「卑怯者!」

「フフフフ……褒め言葉として貰っておくよ」

悔しさの涙を流すなのはを貶すように笑う喜兵衛であったが、

「成る程、事情は良く分かりました」

そう言って一人の青年が立っていた。

「上条君!」

「人ん家の伝統を汚すわ、人の名前を騙るわ、テメエ等相当腐って

んな」

怒りを見せる上条に大柄の男・比留間五兵衛が立ちはだかる。

「兄者、コイツはどうする？」

「殺せ、余計な事を話されては面倒だ」

「んじゃ、そうさせて貰おうぜ」

【ソード】

懐から取り出したUSBメモリを首筋に突き挿す五兵衛。

その瞬間、彼の姿が刃を模した異形と化したのである。

「チツ、ドーパントかよ」

上条はその姿を見て、小さく呟いたのであった。

第1話・その名はW / 街の切り札 (後書き)

次回、その名はW / 幻想を殺す者

第2話・その名はW／幻想を殺す者（前書き）

遂に『変身』の 때가！

第2話：その名はW / 幻想を殺す者

五兵衛の変身した怪人・ソードドーパントは、容赦なく上条を襲う。

「うおっとー！」

すぐさま上条は攻撃を回避する。

「刃物のドーパントか。流石に生身はきついぜ！」

そう言っ上条は『右手』を構えていた。

しかし、ソードドーパントが先に攻撃を仕掛けた。

「オラア！」

彼の手から放たれたエネルギー状の刃が上条を襲う。

「真っ二つになれ！」

ソードドーパントが誇らしげにそう言ったその時であった。

バシユウウンという音と共に、エネルギー状の刃が消えてしまった。

「な!?!」

これにはその場の全員が驚きだす。

「どうした、そんなに驚く事なのか？ まあ、そつだよなあ……」

「あ……あ……あ……」

驚きの余り、声が出ないソードドーパントに上条がこう言った。

「科学・魔術・神秘・怪異……それらを纏めた異能者を『特殊者』アヒリテイと呼ぶ。だがコイツはそんなものですら関係なく、全ての『異能』打ち消す。それが“イマジンプレイカー”……『幻想殺し』の名の由来だ」

「幻想殺し!？」

全員が驚きを隠せなかった。

『幻想殺し』……………三年前、この世界を恐怖に陥れた戦争『第三次マジックアヒリテイ世界大戦』を起こした魔術系特殊者・右方のスフィンマをたつた一人で立ち向かい、彼を倒した英雄の呼び名で、本名は不明であり、戦争が終わった後の消息も不明であった。

「まさか……………お前があのだ幻想殺しとはな」

驚くソードローパントであったが、右手の刃を構えながら、

「ならその首、この比留間が貰ったあああああああ!！」

攻撃しようとするが、突如バイクに吹き飛ばされた。

「んが」

そのままソードローパントは吹き飛び、バイクから一人の青年が降りてきた。

「すまない、遅くなったよ」

長い金髪に翡翠色の瞳の青年に上条は気ダルそうな顔でこう言った。

「遅いぞユーノ」

その言葉を聞いた瞬間、なのはは反応した。

「え？」

その青年の顔に見覚えがあったのだ。

「ユーノ……君？」

彼こそ、行方不明になっていた婚約者のユーノ・スクライアであった。

「ホントにすまない。バーゲンセールのおバサン達に勝てなくて」

「だよなあ〜。バーゲンセールのオバチャン達って特売になると強くなるからなあ〜」

こんな状況で呑気な会話をするが、

「じゃなくて、まずお前には、一番謝らなきゃならない相手がいるだろ？」

上条のその言葉に、

「ああ、そつだね」

悲しげに笑うユーノ。

「んじゃ、まずはこいつ等を片付けるか。」

そう言って上条は奇妙な形のベルトを自身の腰に巻きつけた。

ソレと同時にユーノの腰にも、同じデザインのベルトが出現する。

そして二人は、懐からUSBメモリを取り出した。

【CYCLONE】

ユーノは左手に緑のメモリを、

【JOKER】

上条は右手に黒のメモリを取り出し、互いにWを作るように構えた。

「「変身!」」

するとユーノが右のスロットにメモリを差し込むと、緑のメモリは上条のベルトへと転送される。

ソレと同時にユーノも気を失う。

そして上条は、緑のメモリを深く差し込み、今度は黒のメモリをスロットに差し込むと、それを横に倒したのであった。

【CYCLONE・JOKER】

その瞬間、上条の姿が“右半身が緑で左半身が黒の赤い複眼にW型の銀の触覚、そして首にマフラーを付けた戦士”へと姿を変えた。

ソードドーパントはその姿に驚きを隠せなかった。

「「さあ、その幻想をぶち殺す」「」

これこそが、この世界を守る戦士・仮面ライダーWであった。

ソードドーパントと激突するW。

「ハア、タア！」

凄まじい攻撃で、ソードドーパントを渡り合っが、

「動くな！」

「え？」

すると喜兵衛が、懐に隠していた銃をなのに向けていた。

「動けばこの娘の命はないぞ？」

「テメエ、人質なんて卑怯だぞ！」

Wがそう言うが、

「オラア！」

「ガア！」

隙を突いたソードドーパントに攻撃される。

「テメツ！」

「オイオイ、良いのか？ 人質がどうなっても？」

「このヤロウ……………」

卑怯極まりないk比留間兄弟であったが、

「邪魔！」

「んが！」

突如一人の少女が喜兵衛を蹴り飛ばした。

「アトリ！？ インデックス！？」

「全く、何かあったら呼んでよね」

「そうなんだよ！ とうまもユーノも無茶しないで欲しいかも！！！」

そうやって黒い長髪の少女・紫馬アトリと銀髪のシスター・インデックスは、喜兵衛を何度も踏み付けていた。

「おゝい、その辺にしといてやれよ」

そうやってWは立ち上がると、

「さっきの借り、倍にして返すぜ！」

【HEAT】

【METAL】

赤いメモリと銀色のメモリをベルトに差し込んだ。

【HEAT・METAL】

するとWの右半身は赤に、左半身は銀に変わり、左背部からは、棒状の武器・メタルシャフトが出現し、Wはそれを手に持った。

「行くな、この刀の化物！」

そうやってWは、メタルシャフトを豪快に叩き付けた。

「オラア！」

「ガア！」

「まだまだ行くな！」

Wの棍棒捌きに反撃する暇も無く、

「あらよっ」とー」

ソードドーパントは、そのまま吹き飛ばされてしまった。

「くそ、何やってるんだ！ お前等も……………」

仲間に加勢させようとするソードドーパントであるが、

「アトリ、何かこの人達に用があったみたいなんだよ？」

「え、そうなの？」

既にアトリに全員が倒されていたのであった。

「な!?!」

たった一人の少女に呆気無く部下たちが倒されたため、

「こっぴなつたら 逃げろ!」

逃走をはかろうとするが、

「逃がすかよ!」

【LUNAR・TRIGGER】

今度は右半身を黄色に、左半身を青に変えたWが銃型武器・トリガーマグナムの引き金を引いた。

黄色い弾丸は、軌道を変えながらソードローパントに接近してきた。

「グハア!?!」

そして弾丸は見事に当たり、ソードローパントはそのまま吹き飛ばされる。

【CYCLONE・JOKER】

「当麻君、メモリブレイクだ」

「そのつもりだ!」

Wは再び右半身を緑に、左半身を黒に戻した後、黒のメモリをスロットから抜き取り、右腰の黒いスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

その瞬間、緑と黒の竜巻が出現し、Wはそれに乗るように宙へと上がった。

『ジョーカーエクストリーム!!』

そしてそのままドロップキックの要領で急降下していき、途中で半身が上下に割れながら、

「「「タア!」「」」

「ぐあああああああああ!」」

ソードローパントを倒し、元の比留間五兵衛の姿に戻し、彼から排出されたメモリも砕けたのであった。

変身を解き、なのはに近づくとユーノ。

「ユーノ君……」

「なのは、ゴメン。心配かけ」

謝るうとするユーノに、なのはは強く抱きついた。

「謝らないで。何があったのかは、ユーノ君が話したい時に話して。それまで待つてるから」

「なのは……」

するとユーノはなのはにこう言った。

「なのは、キミに言いたい事があるんだ」

「私も、ユーノ君に言いたい事があるの」

この瞬間二人の声が重なった。

「結婚してください！」

その言葉の後、二人は互いの唇を重ねあっていたのであった。

翌朝、上条はその日の出来事の始末書を書いていた。

「ったく、『幻想殺し』の呼び名に未練も愛着も無えけど、あんな奴等にくれてやるつもりは全くねえよ！」

「そう言えばとうま、ユーノは？」

「え、なのはとデートだったよ」

インデックスにそう言った後、上条は窓の外を見下ろしていた。

そこには、オシャレな私服に着替えたなのはとユーノが、何処かに出かけている様子が見え、

「良かったな、ユーノ」

そう言って上条はテーブルの上のコーヒーを飲もうとするが、

「あー！」

誤って落としてしまい、カップを割ってしまう。

「不幸だ」

第2話・その名はW / 幻想を殺す者 (後書き)

というワケで、Wの変身でした

第3話：魔獣W / 異界からの訪問者（前書き）

新キャラが登場します。

第3話：魔獣W／異界からの訪問者

その夜、奴は動く。

それはまさに狼のように獲物を狙っていた。

「グルルルル・・・」

それも満月の夜に。

魔獣W／異界からの訪問者

二手に分かれて別々のスーパーに向かった。

その帰り、ユーノは品物の入ったビニール袋を手に持ちながら事務所へと帰る。

「随分遅くなったな。大丈夫かな……」

そう思いながら街を歩くが、まさにその時であった。

「グルルルル……」

「ん？」

動物の呻き声が聞こえて来たので、振り返ると、

「アオオオオオオオオン！」

そこには狼をイメージした異形がいた。

「まさか、ドーパント!？」

突然の登場に驚き、ユーノは驚愕する。

「グオオオオオオオ!!」

「うおっ!」

狼男の攻撃をすぐさま回避するユーノであったが、

「クッ、このままじゃ……」

後ろの壁が行き止まりになってしまい、逃げ場をしながら、

「クロスファイヤーシユート!」

突如、謎の光が狼男に当たったのだ。

「グアアアア!」

狼男はその光に当たったため、すぐさまその場を後にした。

「大丈夫ですか!？」

そう言ってオレンジ色の長髪の女性と青い短髪の女性が現れる。

「あ……ああ、有難う」

ユーノは立ち上がってそう言うが、

「え!？」

「嘘!？」

二人は突然驚きだす。

「アナタは、ユーノさん!？」

「な!？ 何故僕の名前を!？」

自分の名前を口に出した二人に驚きを隠せなかったユーノであった。

急いで事務所に戻ったユーノ。

「当麻君!」

「どづしたユーノ!？」

すぐさま上条に声を掛けるが、

「……………その人達、誰？」

そこには赤の長い髪を結んだ男性とセミロングの黒髪の小柄な女性がソファに座っていた。

「話しは後だ。それで俺に何か用なのか？」

「ああ、そうだった。あのさ当麻君、キミ…………『異世界』を信じるかい？」

それを聞いた上条は、

「奇遇だな、俺も同じ事を言おうと思ってた」

溜め息混じりに答えた。

果たして、ユーノが出会った二人と、上条が出会った二人は何者なのか、次回を待て！

第3話：魔獣W / 異界からの訪問者（後書き）

次回、魔獣W / 闇の暗殺者

第4話：魔獣W / 訪問者の正体（前書き）

四人の正体が明らかに！

第4話：魔獣W / 訪問者の正体

「で、アナタ方は？」

上条の問いに、四人は答えたのであった。

「時空管理局のティアナ・ランスター執務官と言います」

「同じくスバル・ナカジマ防災士長です」

「護廷十三隊六番隊副隊長・阿散井恋次だ」

「同じく、十三番隊の朽木ルキアだ。宜しく頼む」

四人の説明を聞いた上条達は、話を纏める。

「つまり、ティアナとスバルは『時空管理局』とかいう組織の魔導師で、別世界に存在する“ロストギア”って奴を回収してるって事か？」

「ええ、正確にはそうなります」

「んで、恋次とルキアは『護廷十三隊』の死神で、“ソウルソサエティ尸魂界”とかいうところから悪霊退治に來たってワケか？」

「ああ、そうだ」

それを聞いた上条は、

「そうかそうか　って信じられるかアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

思わず絶叫した。

「テメエ！ アレだけ説明させておいて、信じねえつもりかよ！」

「当たり前だ！ 第一上条さんは、死神なんざ一回も見たことがねえんだ！」

「そりゃそうだな。今の俺達は義骸キガイに入ってるからな」

「義骸？」

上条の問いに、恋次は誇らしげに答えた。

「俺達死神はな、本来は霊体だから普通の人間には見えねえんだよ。義骸は普段死神が現世で活動できるようにするための仮の肉体なんだよ」

「……………」

流石に上条の頭では追いつけない説明であった。

「まあ、無理に信じてくださって言いませんから、気にしないで下さい」

そんな上条にティアナは優しく答えた。

「んじゃ、今度は俺の番だな。この世界には特殊な能力を才華させてる人達がいるんだ」

次に上条は、この街の人々の能力・特殊者の説明をする。

「特殊者には、四つの分類が存在するんだ。一つは科学技術から生み出させる化学系特殊者、魔術や魔法などの使う魔術系特殊者、妖怪または魔物の力を使いこなす妖魔系特殊者、そして神秘や精霊術の類を使う神聖系特殊者が一人の人間にどれかが存在するんだ。でも、同じ能力でも使用者のランクで強さが変わるんだ」

説明を聞いた四人の内、恋次は小難しそうな顔で眉を歪めた。

「ランク？」

「ああ、特殊者にはレベルがあつてな、例えば同じ能力でもレベルが高い奴ほど強いって事なんだよ」

「では当麻、お前の能力ランクはどのくらいなんだ？」

「……………」

ルキアの問いに、上条は一瞬暗い表情を見せながらこう言った。

「……………Eランク」

「ぷっ………はははははは何だソリヤ!? メチャクチャ低いじゃねえか!」

上条のランクを聞いた恋次は爆笑してしまう。

「恋次、失礼だぞ!」

「だってよ、Eランクだぜ? おかしいに決まってるぜ! あははははははは!」

「スマン当麻。恋次の非礼を許せとは言わんが、もし良かったら私に仕事を手伝わせて欲しいのだが」

恋次非礼を詫びるルキアに、上条は頭を掻きながらこう言った。

「別に良いよ、慣れてるし」

翌朝、万時屋で居候する事にした四人。

「ふあゝ、眠い」

「寝惚けてる場合か。早く起きぬと、朝食に間に合わぬぞ」

そう言つてルキアと恋次は居間に向かった。

「にしても、暇だよな」

「それだけ平和だつてことだ」

「ねえねえティア、テレビでも観ようよ！」

「アンタね、少しは緊張感を持ちなさいよ」

そう言つてテレビを観るスバルに呆れるティアナであつたが、

『此方は、最近生きている「連続狼男事件」の殺害現場です』

アナウンサーの説明を聞いてすぐに画面に目を向けた。

「狼男!?!」

すると、上条の携帯電話が鳴り出し、本人も電話に出た。

「もしもし。カリムさん？ 分かつたすぐに行くぜ」

そう言っつて上条は電話を切った。

「どうしたんですか？」

「依頼だ。今から教会へ行く」

依頼を引き受けた上条は、直ちに外へ向かった。

『神都』にある大きな教会がある。

名は『聖王教会』。

そのこの管理者のカリム・グラシアから依頼を受けた上条当麻。

無論、ルキア達四人も来ていた。

「すみません上条さん。何時もながら事件に関わってしまっつて」

「気にすんなよ。俺は依頼人の願いを叶えるために来たんだから」
申し訳ない顔をするカリムに、上条は笑顔で答える。

「それで、依頼は最近横行してる狼男か？」

「ええ。お分かりの通り、このままでは街に住む人々が夜道を歩けなくなってしまうのです。毎晩教会でお祈りをする方々も居りますので……………」

それを聞いた上条は、立ち上がってこう言った。

「分かった。この依頼、引き受けるぜ」

「い……………良いんですか？」

「ああ。任せとけて」

その言葉を聞いたカリムは笑顔を見せ、上条達もそれを見て教会を後にした。

事務所に戻った上条は、ユーノに『検索』を頼んだ。

「行くよ」

するとユーノは目を閉じ、己の空間へと入った。

「何……………やってるんだ、アイツ？」

恋次の問いに、上条は答える。

「ユーノの能力は『ワインズマン賢者』つってな、パーソナルリアリティ自己現実に入ってあらゆる知識を探し出すことが出来るんだ」

「パー……………何だ？」

「パーソナルリアリティ自己現実……………簡単に言えば“自分だけの現実”を作り上げる事で、それはAランク以上のアビリティ特殊者しか使えないんだ」

「ではユーノ殿は、現在その中に入り込んでいると？」

「そう言うこと」

それを聞いたスバルとティアナは念話でこう話していた。

「（てことはティア、ユーノさんがその気になれば……………）」

「（無理よ、いくらユーノさんでも、能力が万能ってワケじゃないから）」

「終わったよ」

そう言ってユーノは『検索』を終わらせていた。

その夜、狼男が再び動き出した。

「グルルルルル………」

呻き声と共に新たな標的^{ターゲット}を狙い、襲い掛かる。

「グオオオオオオオオオオ！」

「オラァ！」

しかし、そのターゲットに返り討ちにされてた。

「ガア！」

吹き飛ばされる狼男。

「待ってたぜ、狼男さん」

すると上条当麻が暗闇の中から現れた。

「まさか、こんな罠に引っかけられてくれるとはなあ。正直嬉しい限りだぜ」

そう言つて上条は、ダブルドライバーを装着し、ジョーカーメモリを構える。

「さあて、この街を泣かせた罪……数えて貰うぜ！」

【JOKER】

そして事務所にいるユーノも、サイクロンメモリを構えた。

【CYCLONE】

「変身！」

差し込まれたメモリは、上条のベルトへ転送され、ユーノは同時に気を失う。

転送されたメモリを奥へ差し込んだ上条は、自身のメモリを差し込

み、スロットを横に倒した。

【CYCLONE・JOKER】

その瞬間、上条は仮面ライダーWへ変身し、

「うっしや、行くぜ！」

狼男に突撃した。

その光景を見ていたルキア、ティアナ、スバル、そして女装姿の恋次。

「何で俺が女の格好なんか……………／／／／」

「でも似合ってるぞ？」

「コノヤロウ……………」

ニヤニヤと黒い笑みを見せるルキアにキレル恋次。

「でも凄いですよね、上条さん」

「まさかあんな姿に変わるなんて……………」

その姿に驚きを隠せなかったスバルとティアナ。

一方のWは、狼男と激突を繰り返していた。

「オラァ！」

「グオオオオオオオ！」

しかし、狼男には全く通用していなかった。

「ガLLLLLLLL……………」

「頑丈な奴だな！」

「当麻君、こつ言う場合はヒートジョーカーだ！」

「よし！」

【HEAT・JOKER】

するとWは、右半身が赤のヒートメモリの能力を宿すヒートジョーカーにメモリチェンジした。

「うおおおおお！」

炎を纏った右手の拳を握り締め、その拳で思いっきり狼男を殴った。

「ガア！」

「結構効くじゃねえか！」

「どんな獣でも、火に弱いつて言うからね」

「いや、言わねえと思う」

「そうかい？」

会話をしながらWは狼男に接近する。

「う……………うう……………」

徐々に弱まっている狼男に、Wはジョーカーメモリをマキシマムスロットに差し込んだ。

「さあ、その幻想をぶち殺す！」

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

「ハアアア……………タア！」

するとWは、拳に纏った赤と紫の炎で飛び、半身を割れだした。

「ジョーカーグレネード！」

そのまま狼男に向かいながら、連続でパンチを喰らわせる。

「オラア！」

「グアアアアアアアア！」

最後の一撃を喰らい、狼男は爆発する。

「どんなモンだ！」

狼男の正体は若い男で、『狼の記憶』を宿したウルフメモリの所有者であった。

事件を解決した上条は、カリムから報酬を貰い、そのまま街を歩いていた。

「……………」

静か過ぎる街の中、上条は笑いながらこう言った。

「今日も平和だな」

そんな彼とすれ違うように一人の青年が歩き出した。

その姿は、白を基調とした服に白い髪、そして赤い瞳を持ち、現代的なデザインの杖を突いていた。

彼は一瞬、上条を見ると、

「これ以上、お前に戦わせねえよ」

そう言って一本のメモリを見詰める。

【ETERNAL】

第4話：魔獣W／訪問者の正体（後書き）

次回・白き悪魔Eノシスコンとデートの阻止と黒い切り札

第5話・白き悪魔Eノシスコンとデートの阻止と黒い切り札（前書き）

イキナリ『J』と『E』が!?

第5話・白き悪魔Eノシスコンとデートの阻止と黒い切り札

上条当麻は、神都で有名な遊園地の正門の前にいた。

別に遊びに行くためではない。

その理由は、彼の目の前にあった。

白き悪魔Eノシスコンとデートの阻止と黒い切り札

遊園地の正門前、ユーノはある人物を待っていた。

「ごめくん、待たせた？」

婚約者のなのではあった。

「うっん、全然平気だよ。 行こうか」

「うん／＼／＼」

そんな二人をライフルのスコープで見ていた人間がいた。

「ふざけやがって……何が“全然平気”だ！ 普通お前が待たせる方だろうが！！ 上条、お前土台になれ！」

「待たんかいイイイイイイイ！！」

茂みの中、なのはの兄・恭也がサングラスを掛け、ライフルを構えていた。

無論、父親の士郎もである。

「昨日の依頼であった“手助けが欲しい”ってそう言うことなの！？ なのはとユーノのデートを邪魔しろって言う意味だったの！？」

ツッコむ上条に士郎と恭也は怒鳴った。

「お前に分かるか！ 可愛い娘（妹）をあんな男に疵物にされる父親（兄貴）の気持ちか！！」

「知らねえよ！ アンタ等の歪んだ愛なんざー！！」

「全くだな」

怒る任せのツッコミをする上条に対し、ルキアは呆れてしまう。

「……………」

『高町家』の人々を良く知っているティアナとスバルは苦笑せざる終えなかった。

「ん？ 恋次、何をやってるのだ？」

「誰が恋次だ」

「は？」

すると恋次はサングラスに黒いスーツ、そしてライフルを手にしていた。

「俺は殺し屋『RENNJ13』だ！」

「何が『RENNJ13』だ！？ 貴様までこの悪ふざけに参加するつもりか！！」

幼馴染のボケに付いて行けなくなったルキア。

「土郎さん、恭也、俺も手伝うぜ！ 俺もユーノみてえな軟弱野郎が一番気に喰わねえんだ！！」

「お前……………」

「恋次君……………」

「行くぜ二人とも！」

「「おう！」」

「ってオiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！」

上条が叫ぶも、既に三人は正門を潜っていた。

「不幸だ……………何でこんな事に……………」

「言ってる場合でないぞ上条！ 行くぞー！」

「ホラ、行くよ当麻」

こうして上条達六人は、追い掛けるのであった。

「まったく、本当に此処で間違い無エンだろオな？」

白い姿に白い髪、そして赤い瞳の青年・一方通行は携帯電話を手に持ち、電話を通じて誰かと話していた。

『ああ、間違いない。問題は“奴”がどうしかけてくるかだ』

「チツ」

『まあ、そんな苛立つな。いずれ標的は自分から現れるさ。んじゃ任せませよ、一方通行』

電話の相手・土御門元春はそう言って電話を切った。

「ハア……………大体遊園地何ぞ俺の性に合わねエしよ」

「早く早くうゝってミサカミサカは大きく手を振ってみたり！！」

溜め息をつく一方通行に向かって、十代前半くらいの少女・打ち止め（ラストオーダー）は大きく手を振っていた。

「まったく、コレだからガキはよオ……………」

「あら、良いじゃない？ ミサカも遊園地に行ってみたかったし」

打ち止めを一方通行と同じくらいの体格にした少女・番外固体がニヤニヤした顔で笑う。

「チツ」

舌打ちしながらも一方通行は二人と共に遊園地へ向かったのであった。
アクセアラータ

一方その頃、

「御坂さん、早く!」

「ちょっと初春さん、そんなに焦らなくても皆逃げないわよ」

茶髪に学生服姿の少女・御坂美琴は、後輩の白井黒子と風紀委員の同僚の初春飾利、そして初春の同級生の佐天涙子と共に遊園地に遊びに来ていた。
ジャツジメント

「それで? 最初は何処に行くの?」

「私、ジェットコースターに行きたいです!」

そんなガールズトークを広げていたが、

「!?!」

御坂は突如何者かの気配を感じ取った。

「御坂さん？」

「あ、ううん。 何でもないわ」

気のせいだと思いつつ、御坂は三人の元へ向かった。

その頃上条はというと、

「野郎、やりやがるな！ コイツを選ぶたあ」

「狙いが定まらない、何か気持ち悪くなってきた」

「それより二人とも、この馬は何時になったら止まるんだ？ 距離が一向に縮まらない！」

「縮まるか！ これメリーゴーランドだぞ！ この土台ごと回ってるんだよー！」

「貴様等は永遠に回り続けるー！」

メリーゴーランドに乗っていた。

「何だオメエ等？ 殺し屋同盟に入りてえのか？」

「アナタ達が余計な事しないか見張りに来たのよー！」

「頼むから止めてくれない？ 上条さんは相棒の休日を誰にも邪魔して欲しくないんだけど」

「奴がなのはから離れるまで絶対に邪魔するからな！」

「……………兄の風上にも置けぬ台詞が出てきたな……………」

三人の人騒がせっぷりに、上条達はお手上げであった。

その同時刻、一人の男が何かを眺めていた。

男は一本のメモリを使い、それを自分の首筋に当てた。

【イーグル】

その瞬間、男の姿は鷲を模した異形と化した。

果たして、彼の目的は!?

どのアトラクションに乗るかを迷う御坂達であったが、

「キヤアアアアア!」

「え!?!」

突如悲鳴が聞こえたのだった。

「お姉様、アレを!」

「嘘!?!」

黒子が指を差す方へ顔を向けると、そこには鷲をイメージした怪人がいた。

「黒子、サポートをお願い! 初春さんと佐天さんはこの場にいる人達の非難を!」

「はい!」

「御坂さん、気を付けて!」

「行きましようお姉様!」

「ええ!」

すると御坂は、右にスロットが付いたベルトを腰に巻くと、懐から紫で「と書かれた黒いメモリを取り出す。

【JOKER】

御坂は、メモリをスロットに差し込むとそれを横に倒した。

「変身！」

【JOKER】

その瞬間、御坂はWに酷似した黒い戦士に姿を変えた。

『切り札の記憶』を宿す漆黒の戦士・仮面ライダージョーカーが、
此処に参上した。

「さあ、これで決まりよ！」

第5話・白き悪魔Eノシスコンとデートの阻止と黒い切り札（後書き）

次回、白き悪魔Eノ観覧車と超電磁砲と『永遠の記憶』
レールガン

第6話・白き悪魔E / 観覧車と超電磁砲と『永遠の記憶』 (前書き)

今回はWは出ません

第6話：白き悪魔E / 観覧車と超電磁砲と『永遠の記憶』

御坂美琴が変身した戦士・仮面ライダージョーカーは、鷲の怪人・イーグルドーパントと激突を繰り出していた。

「ちえいさー！」

白き悪魔E / 観覧車と超電磁砲と『レールガン永遠の記憶』

ジョーカーの爆発的な身体能力による格闘戦法に翻弄されるイーグルドーパント。

「止めよー!」

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

右足に紫色のエネルギーを纏わせたジョーカーは、跳び蹴りを叩き込んだ。

「ライダーキック!」

しかし、イーグルドーパントは翼を広げ、空へと飛び去ったのであった。

「嘘!? ソレあり!?!」

流石のジョーカーも、空中戦までは出来なかった。

その頃、上条達はどうして...

「ハア……やっと飯の時間だ。　コレなら二人を見張る事ができる」

「しかし……二人は本当に幸せそうな雰囲気を見せてるな」

なのはは、自分のお手製のサンドウィッチをユーノに食べさせていた。

そんな様子を陰で見ていた土郎と恭也は、ドス黒い殺気を放っていた。

「嫉妬つて怖えな」

上条はそう言いながら、

「食欲も怖いかな」

バクバクと皿の塔をつくりながら料理を食すインデックスとアトリを見ていた。

「すまぬが、トイレに行ってくる」

「ああ、構わねえよ」

ルキアは席を外し、トイレへと向かった。

「フウ……………」

トイレを出たルキアは、上条達の元へ向かった。

だがその時、一人の人物とすれ違った。

「!?!?」

その時、ルキアはある悪寒を感じ取った。

「(な……………何だ、今の気配は!?!? とても人間のモノではなかった
……………まるで……………怪物!?!?)」

振り返ったルキアは、その人物を見る。

無論、彼もルキアに気付いたのか、彼女の方を見た。

「何だア、お前?」

「……………」

ルキアは心の中で、こつ叫んだはずである。

もし、この世に悪魔と呼べる存在がいるとしたら、それは目の前にいるのかも知れないと。

その人物は白い姿に白い髪、そして赤い瞳をした青年であった。

「ルキア、どうした？」

「!？」

すると、上条が声を掛けてきた。

「と、当麻!？」

「あん？」

すると、彼も上条を見る。

「あれ、アクセアラレータ一方通行じゃん、久しぶり」

「……………ああ、じゃあな」

青年・アクセアラレータ一方通行はそう言って返事をした。

アクセアラレータ一方通行が立ち去った時、ルキアは全身の汗腺から一気に汗が噴き出してしまう。

「ハア……………ハア……………ハア……………」

ルキアはこの時、初めて人間に対する恐怖を覚えてしまったのであった。

昼食を終えたなのはとユーノを追跡する恋次達三人　を追う上
条達六人。

すると恭也は叫びだした。

「まずい父さん！　二人が観覧車に向かっている！　観覧車と言えば、
キスの代名詞と言われるアトラクションだ！！」

「何イイイイイ！？　なのはの貞操が危ないイイイイイイイイ
！！」

「二人とも、行くぜ！」

そう言って三人は駆け出すが、

「もう、疲れた」

上条はそう言って溜め息を付いた。

「何やってるのアンタ？」

「あ、御坂に白井。あと初春と佐天だったな」

すると偶然美坂達四人に会った。

「だいぶお疲れのご様子ですわね。何があったのですの？」

「うん、実は……………」

上条は、御坂達にこれまでの経緯を話したのであった。

その頃、そんなことも知らないなのはとユーノは……

「綺麗」

「そうだね」

観覧車から見た景色に和んでいた。

「なのは」

「何？」

「実は、キミに僕の正直な気持ちを伝えたい／＼／＼／」

「え／＼／＼／」

徐々に良い雰囲気になろうとされていたその時、

「「え？」」

ブロロロロとヘリコプターが飛んできて、そこから三人の男がサングラス姿にライフルを構えていた。

「俺達は……」

「殺し屋……」

「『翠屋13』！！」

「「「お命頂戴！！」」」

ライフルの銃口は、ユーノに向けられるが、

突如、閃光のようなものがヘリコプターの機体を貫通した。

「「「えええええええええええええええええ！？」」」」

突然の出来事に三人は驚き、そのままヘリコプターは池に落ちたのであった。

「……………何だったんだろう、あの人達？」

そう思ったなのはであったが、

「あの、なのは……………良いかな？」

「あ、はい！」

ユ一ノが自身の思いを伝えるのであった。

「なのは、これからもずっと……………いや、キミと一生を共にしたい！
僕と結婚して欲しい！！」

それを聞いたなのはは、強く抱きしめ、

「私の全て、アナタに捧げます」

返事を返したのであった。

因みに、『翠屋13』の三人は……

「ハア、ハア、偉い目に遭った」

「まさか閃光がへりを破壊するとは……」

そう言ってボロボロの姿で歩くが、

「はあくい、そこまで」

「あ……あれ、上条さん？」

そこには、何時でもスタンバイOKの上条や御坂達がいた。

「事情は上条さん達から聞きました」

「一組のカップルの恋路を邪魔するとは、許しがたい行為ですの」

「すこおし、頭を冷やしましょうか？」

すると御坂は、自身の異名にして十八番の必殺技『超電磁砲^{レールガン}』を放った。

超電磁砲^{レールガン}は三人の顔を横切る。

恋次はこの光景を見て、先ほどのへりを破壊したのが御坂であると感付いた。

「そんなワケで……………」

せーのと10人は、上条の決め台詞を良いながら、

『まずは、その幻想をぶち殺す!!』

一斉に飛び掛った。

「「「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」「」

士郎、恭也、恋次の三人は、見事にボコボコにされてしまう。

後に、桃子にキツイお説教を受けることになるのは、また別の話である。

一方その頃、別の場所では……………

「まさか、仮面ライダーに出くわすとは……………」

仮面ライダーから逃げる事が出来たイーグルドーパントであったが、

「!? 誰だ!?!」

突如何者かの気配を感じ取った。

「つうーかよオ、ワザワザこんなどころまで足を運んだっていつの
によオ……………何だア、このバカみたいな三下はよオ?」

白い髪に赤い瞳の青年がイーグルドーパントを見ながら歩き出して
きた。

イーグルドーパントは、相手が誰なのかが見当がついた。

「まさか……………一方通行? アクセアレータ 科学系最強と呼ばれている、Sランク特
ビリテイ 殊者!?!」

彼の正体を知った途端、イーグルドーパントの頭の中は、恐怖に支
配されていた。

「(む……………無理だ! あんなドーパント以上の怪物に、勝てるワケ
がない!!)」

「さアてと、この俺を相手にするんだ。 覚悟は出来てんだろオな
! あア!?!」

その瞬間、アクセアレータ 一方通行は右側のみにスロットが付いたベルト・ロスト
ドライバーを装着し、一本のガイアメモリを取り出した。

【ETERNAL】

「変身！」

メモリをスロットに差し込み、横に倒した。

【ETERNAL】

すると、アクセアレイタ一方通行の体は徐々に白いボディに横向きのEを模した白い触角、そして黄色い複眼に青い炎に包まれたような装甲を纏った手足の戦士に変身した。

『永遠の記憶』を宿す戦士・仮面ライダーエターナルの参戦である。

「さア、地獄を楽しめエ！」

エターナルはそう言って、拳を振るいだす。

しかしイーグルドーパントは、翼を広げて空へと逃げる。

「ハッ！ いくら貴様でも、空中戦までは出来ないようだな！！！」

地上を見下ろしながら勝ち誇るイーグルドーパントであった。

だがエターナルは、それを全く気にしてはいなかった。

「ギャハハハハハ！ ワザワザ的になってくれてどオモ有難オ！！！」

エターナルは四つの竜巻を背中に接続して、イーグルドーパントを追いかけるように飛び上がった。

「!?!」

流石のイーグルドーパントも、心の中で叫んだ。

逃げられないと……

「悪いが、こつから先は一方通行だア！」

するとエターナルは、銀色のメモリをマキシマムスロットに差し込んだ。

【WEATHER MAXIMUMDRIVE】

その瞬間、背中の竜巻は数倍に大きくなり、

「大人しく尻尾巻きつけて、無様に元の場所へ引き返しやがれエ！」

竜巻と雷を纏った拳で、容赦なくイーグルドーパントを殴り落とすた。

「グアアアアアアアアア！」

攻撃を喰らったイーグルドーパントは、地面に叩きつけられると同時に爆発し、元と青年の姿に戻ったのであった。

「つたく……調子に乗ってんじゃねエぞ、三下が」

そう言って変身を解いた一方通行は、アクセラレータ現代的なデザインの杖を突き

ながらその場を後にした。

第6話・白き悪魔E / 観覧車と超電磁砲と『永遠の記憶』 (後書き)

次回・Lの話術 / アクセル参戦と放課後ティータイム

第7話：Lの話術／アクセル参戦と放課後ティータイム（前書き）

アクセル登場です。

第7話：Lの話術／アクセル参戦と放課後ティータイム

平和な時間を過ごしている万時屋一向。

「ハア……平和だな」

するとインデックスはテレビの音楽番組に夢中であった。

「音楽って良いよね」

すると、インターホンが鳴り出した。

「はぁーい」

ユ一ノは玄関を開けると、そこには長い茶髪に眼鏡を掛けた若い女性がいた。

「学校の先生ですか？」

依頼人の名前は山中さわ子。

桜ヶ丘高校の教師を務めている。

「実は、私の生徒の平沢さんと言う子が、様子が可笑しいんです」

「おかしい？」

「なあなあ、平沢ってあの平沢唯ちゃんか？」

「ええ、そうですけど……ん？」

聞き覚えの無い声に応えるさわ子であったが、

「って何でいるのオオオオオ！？」

そう言って上条は、短い茶髪に腰まで長い長い金髪の女性に驚く。

茶髪の女性は八神はやて、金髪の女性はフェイト・T・ハラオン。

なのはの幼馴染で、ユーノの友人でもある。

「いやあ、久々にユーノ君に会いに来たんやけど、お取り込み中みたいやし」

「てか、その平沢って子のこと、知ってるのか？」

「え、まさか当麻君……『放課後ティータイム』の事知らんのか！？」

「何それ？」

その一言で全員が驚いた。

「放課後ティータイムといえば、桜ヶ丘高校の女子生徒で有名な人気ロックバンドで、平沢唯ちゃんはそのボーカル兼ギター担当なんやー!!」

「尚更知らん」

本当に知らない上条であった。

「それで、その子がどうかしたんですか？」

「実は平沢さん……最近調子が出ないと言っか、何かスランプに陥りやすくなってるんです」

それを聞いた上条は疑問を感じた。

「スランプは誰にもあるんじゃないのか？」

「でも平沢さんの場合、それが酷くなってるというか、徐々にエスカレートしてるんです」

「何か心当たりは？」

それを聞いたさわ子は首を横に振った。

「そうか……分かりました。この依頼、引き受けます」

上条はそう言っ立ち上がった。

午後5時、平沢唯が自宅に帰っているところであった。

「無駄だよ唯ちゃん。私からは逃れられない」

一体の異形が彼女を見ていた。

「なに女子高生をコッソリ見てんだよアンタ？」

すると異形の後ろで茶色を基調としたジャージにGパンを穿いた青年・浜面仕上が立っていた。

「電波塔の道化師”ってのはアンタの事か？」

「な、誰だいキミは!？」

「質問を質問で返してんじやねえ!」

浜面はバイクのハンドル部に良く似たベルトを腰に巻いた。

【ACCEL】

「変身！」

【ACCEL】

スロットにメモリを差し込み、ハンドルを右のハンドルを捻る浜面。

その瞬間、浜面の姿がフルフェイスヘルメットを模した仮面に青い複眼、そしてオートバイクを模した赤いボディの戦士・仮面ライダーアクセルへと変わった。

「さあ、振り切るぜ！」

「『電波塔の道化師』？」

情報収集を行っていた上条は、高校時代の友人で青い髪にピアスを付けた関西弁の青年（以下青髪ピアス）からある情報を聞いていた。

「そうなんや。 正体不明の詐欺師でな、ソイツの被害に遭った若者達も数多くいるんや」

「（ドーパントってことか……）」

「カミヤん、気を付けた方がええで」

「へ？」

「何でもソイツに出遭った人達は、皆まるで夢を失ったような顔をしてしまって、中には自殺未遂をしようとした奴もおるんや」

それを聞いた上条は、拳を握りながら呟いた。

「（もし、それがドーパントの仕業なら、絶対に許すわけにはいかねえ）」

一方でドーパントと戦闘を繰り広げていたアクセルは、

「強いなキミは、面白くなってきたよ」

「フザケンな！」

ドーパントの発言にアクセルは、大剣型武器・エンジンブレードを振るい上げる。

人気の無い公園まで吹き飛ばしたアクセル。

「流石は仮面ライダーだ。だが、そんな攻撃じゃ私は倒せないぜ！」

ドーパントは口部分から針状の飛び道具を飛ばすが、アクセルはそれを左腕で弾いた。

「だったら試してみるか？」

アクセルは、エンジンブレードの内部にギジメモリ・エンジンを挿入し、引き金を引いた。

【ENGINE MAXIMUMDRIVE】

「ふ、は、たあ！」

そしてAの字を描くように飛ばしす斬撃『エースラッシャー』を放った。

「ぐあああああああ！」

攻撃を喰らったドーパントは、その場で爆発する。

「絶望がアンタのゴールだ！」

「わ、私のメモリがバラバラに！！！」

ドーパントは最後の悪足掻きに再び針を飛ばしたが、アクセルはそれを再び腕で弾いた。

「本体は逃げたか……」

変身を解いた浜面は、メモリをハンカチで包む。

「これで事件解決だな……ん？」

しかし、一瞬違和感を覚えた浜面は、ハンカチを開くと、

「『酔……昆布』？」

丁度ガイアメモリくらいの大きさをしたお菓子の小箱を目にして、

「やられたアアアアアアアアアアアア！！！」

思わず絶叫したのであった。

「もしもし、浜面？ どうした？」

浜面から電話を受けた上条は、彼からドーパントの情報を受ける。

「ドーパントが、平沢唯を！？」

『ああ、良く分かんねえけど、ソイツその子を狙ってるんだ』

「戦ったのか？」

『ああ！ でも相手は暗示をかける能力があるみてえなんだ。俺もさっきやられたばかりだ』

「分かった、その事をユーノに連絡しといてくれ。俺、手が離せない状況なんだ」

『悪いな、助かるよ』

そう言って浜面は電話を切った。

「暗示を掛けるドーパントか……厄介だな」

上条も同じ事を考えながら走って行った。

とある広場まで歩いた上条は、少し休んでいると、

「ちよいと、そこのお兄さん」

「ん？」

一人の中年男性に声を掛けられる。

「アンタは？」

「沢野幸男。 此処で詩を書いて送ってるんだ」

「へえ」。 そう言えばさ、幸男さんはこの辺で茶髪の女子高生を

見なかった？」

「もしかして唯ちゃんの事かい？」

「あ、知ってた？」

「あの子ね、中々面白い子だったよ。夢は軽音部の友達と武道館ライブに行くとかでっかい夢持ってたさ」

「ふうん。 凄い子なんだな」

幸男から唯の情報を少しばかり聞くことが出来た上条であった。

一方ユーノは、浜面からドーパントの情報となる手掛かりを『検索』していた。

「道化師……嘘……針……此処までは分かった。他にキーワード

は？」

「掴み所が無い奴だったからな。口の軽い……ふざけた奴だった」

「口が軽い？」

その瞬間、ユーノの頭の中のパズルには、全てのピースが揃った。

「浜面君、分かったよ！ 敵のメモリの正体が……！」

一方の上条も、ルキアと恋次、スバルとティアナと共にある廃工場の近くまで唯の通学路を辿っていた。

すると、ある声が聞こえた。

「アナタね、最近平沢さんを付き纏っていたのは……！」

声のする方へ向かうとそこにはさわ子がいたが、

「アイツは!？」

彼女と口論してるのは、異形の存在であった。

「まさか、浜面の言っていたドーパントか」

さわ子は、ドーパントにこう言い出した。

「コレ以上、私の生徒に近づかないで!！」

「そういうワケにはいかないなあ。なんせ折角面白くなってきたのになあ」

その瞬間、上条が飛び蹴りを叩き込む。

「ワケ分かんねえ事言ってるじゃねえええええええええええ!!！」

「んが!」

見事に吹き飛んだドーパント。

「ルキア、中山先生を!」

「さわ子殿、此方へ!！」

さわ子を避難させ、いるのは上条とドーパントのみであった。

「テメエ、ナニモンだ!」

「私かい? 私は……」

そう言って手で口元を隠すような体勢に入り、

「私はお前のご主人様だ!!」

口から針を飛ばすが、

「好き勝手やってくれたコノヤロー!!」

アクセルに受け止められてしまう。

「げ!?!」

「上条、コイツのメモリの招待は『라이어』だ!」

「『L A E』……『嘘の記憶』ってことか!」

「奴は言葉を凝縮した針を刺す事で、相手に自分の嘘を信じ込ませる事が出来る!」

アクセルの説明を聞いた上条はダブルドライバーを装着しながら納得する。

「成る程な、その針を使って……平沢に“自分はネガティブになりやすい”っていう嘘を信じ込ませたのか!」

「嫌な雲行きだな……逃げるが勝ちかな?」

そう言ってライダーコートは逃げようとするが、

「逃がさずと思ったかしら？」

「甘エンだよ」

アクセアレータ
一方通行と御坂が現れた。

「いくぜユーノ！」

【JOKER】

「ああ」

【CYCLONE】

「行くわよ！」

【JOKER】

「地獄を楽しめよ、三下！」

【ETERNAL】

「」「」「」「」
「変身——！」

【CYCLONE・JOKER】

【JOKER】

【ETERNAL】

上条 & amp; ユーノは仮面ライダーW、アクセラレータ一方通行はエターナル、
御坂ジョーカーへと変身した。

「ハッ、タア！」

「逃がさない！」

「騙された分の利子、払ってもらっぜー！」

【ENGINE・ELECTRIC】

電気を纏ったエンジンブレードでライアードーパントを斬り裂く。

「奴の針には要注意だ」

「だったら！」

【LUNAR・TRIGGER】

「喰らえ！」

追撃能力を持つルナトリガーで仲間をかわしながらライアードーパ

ントを狙撃する。

「ガア！」

「メモリブレイクだ！」

そう言っつてメモリを抜こうとしたその時であった。

「あれ？ これ、どう言うこと？」

偶然か必然か、平沢唯がこの場所に来ていた。

「ニヤリ」

その瞬間、ライアードーパントは何かのボタンを押した。

ドガンと小さな爆発音が聞こえ、鉄材が唯に向かって落花してきた。

「!?!」

「危ない！」

すぐさまジョーカーが走り出した。

果たして、唯の運命は!?!?

第7話：Lの話術／アクセル参戦と放課後ティータイム（後書き）

次回、Lの話術／ふわふわ時間タイムと騙し撃ち

第8話・Lの話術／ふわふわ時間と騙し撃ち（前書き）

後編です。

第8話：Lの話術／ふわふわ時間と騙し撃ち

唯の頭上に落ちる鉄材。

「危ない！」

駆け寄るジョーカー。

そして、ババババと落ちる鉄材。

「御坂！」

果たして、唯とジョーカーこと御坂の運命は！？

Lの話術／ふわふわ時間と騙し撃ち

鉄材によつて出来た砂煙で二人の安否が見えない。

「まあ、これで生きてたら運が良いけどね」

「デメエえええええええええ！」

「待て恋次！」

ライダーパントの発言に怒りを爆発させた恋次は刀を抜いた。

「“赤い仮面ライダーがドーパントだ”！」

するとライダーパントは言葉の針を恋次に飛ばした。

針を刺された恋次は、

「よくも騙したなこの嘘つき野郎!!！」

そう言つて斬魄刀・蛇尾丸を開放した。

「おおわ!!！」

突然の攻撃にアクセルは攻撃される。

「よせ！ アンタは騙されてるだけだ！！」

「そんな嘘に騙されるかよ！！」

完全にライダーパントの思う壺になってしまった恋次。

「だったら私が！」

そう言つてスバルがデバイス・マツハキヤリバーを起動させたが、

「“白い仮面ライダーがドーパントだ”！」

ライダーパントの針をモロに喰らい、

「うおおおおおおお！！」

エターナルに狙いを変えた。

「はア……だろオと思つた」

変身を解いた一方通行は、

「はあああああ！！」

攻撃してきたスバルの顔面を鷲掴みし、

「暫らく寝てる！！」

そのまま思いつきり恋次の方へ投げ飛ばした。

「コレで終わりだ　んが!？」

そして恋次の頭にスバルの頭がぶつかり、二人は気を失った。

「……互いに大変だな」

「ですね」

その様子を観ていたルキアとティアナは、一瞬の共感を覚えたのであった。

一方のWは、ライアードーパントを睨みつけ、

「テメエ……いい加減にしやがれ!!」

走り出したのである。

「フフフフ……無駄だよ」

そう言っつてライアードーパントは再び針を飛ばした。

「“その黒髪のお嬢さんとオレンジ髪のお嬢さんがドーパントだ”！」

Wは右手を振るい、針を刺された。

「当麻！」

これにはルキアもティアナも動揺してしまう。

「ハハハハハ、これで私はおさらば出来」

「出来ると思っただか？」

「へ？」

突然の声にライアードーパントは顔を向けると、そこにはWが拳を握りながら突撃していた。

「オラアアアアアアアア！」

「ンガア！？」

Wのパンチを喰らったライアードーパントは、吹き飛ばされてしま
う。

「ど、どついつことだ!?!」

「どつした?」

「なら、 “お前は私の召使いだ”!」

再び針を飛ばが、

「効かねえよ」

Wが右手を突き出すと針はその場で消滅した。

「何!?!」

驚くライアードーパント。

「それじゃ、止めといくぜ!」

「こつなつたら……」

しかしライアードーパントは、懐からあるモノを叩き付けた。

「さいなら!」

すると煙が出現し、ライアードーパントも姿を消した。

「ヤロツ! 逃げやがった!」

「今は平沢さんと美琴ちゃんが先だ」

「ああ、そうか！ 御坂！！」

鉄材の山に向かうと、

「全然、大丈夫よ」

そう言って御坂が唯を抱きながらサムズアップをしていた。

その際、一方通行はライアードーパントアクセアレータが立ち去った場所で、あるモノを拾った。

「何だア、コリヤ？」

事務所で茶を飲む一同。

「大丈夫か？」

「うん」

「平沢さん、何があつたの？」

さわ子の言葉に、唯が口を開いた。

「明日のライブで失敗しそうな気持ちになつて、都市伝説で『神都神社でお参りをすると一番強い願いが叶う』っていうお呪いがあるのを思い出して、それで神社でお参りをしたんだけど……」

「最近、不運な出来事が起きてしまつたと？」

「うん、『願いが叶う代償に不幸な出来事に見舞われる』って……」
そう言つて落ち込む唯に、どう言えば良いのかが分からない一同であるが、上条がこう言つた。

「別に気にする事無いと思つぞ？」

「え？」

「“願いが叶う代償に不幸な出来事に見舞われる”？ 知るかよそんなもん。 だったら不幸に負けずにその幻想に打ち勝てば良い。 そうだろ？」

上条の言葉に唯は笑顔で首を縦に振つた。

「うん！」

その頃、席を外していた御坂と一方通行に浜面、そしてユーノの四人は事務所のクローゼットにある隠し部屋にいた。

「最初の戦いで俺は奴の“嘘”^{はり}を二度刺されたってことか」

浜面はライアードーパントとの戦いを思い出してそう言った。

「しかも本人はやられず、メモリも偽者だった」

「恐らく戦闘力自体は低いが、能力自体は厄介な方だ」

「しかも、相手の挫折を観るのが好きな愉快犯ときたまもんだぜ」

「何かムカつく相手ね」

「もう一度調べ直す必要があるようだね」

再び捜査が行われたのであった。

当日、唯は軽音部の仲間達と共にある場所へ向かった。

「デケエな」

「うん」

それはコンサート会場であった。

軽音部のメンバーは、此処でライブをすることになったのだ。

「そんじゃ、行くぜエエエエエエエエ！」

「oooooooooooo!」「」「」「」

ライアードーパント捜索を開始したユーノは、『ワインズマン賢者』を発動していた。

「それにしても、相手が分かったのに居場所が特定出来ないとは難しいものだな」

「だったら良イのがあるぜ。和紙だ」

アクセアラータ一方通行の一言で、全ての欠片ピースが揃った。

「ビンゴだ、アクセアラータ一方通行！」

「野郎が立ち去った場所でコイツが落ちたのを見つけた」

そう言つてアクセアラータ一方通行は小さな長方形に切り取られた和紙を見せる。

「分かったよ。その和紙を使う職業を持っている人物……つまりドーパントの正体は、路上作詩家の沢田幸男だ！」

それを聞いたインデックスがこっぴど叫んだ。

「そう言えば、ゆいもその人からお呪いの話を聞いたって……！」

上条は彼と始めてあった公園に向かうが、物気のない空であった。

「いない……………」

「カミヤくん」

「青髪？」

すると青髪ピアスが上条の前に現れた。

「さつき幸男っておじさんが、カミヤんに渡してくれて」

「ん？」

手渡された色紙には、「ご苦労さんでした」と墨字で書かれていた。

「やられたあああああああ！」

コレを見た上条は、絶叫してしまった。

上条からの連絡を受けた一同は、苛立ちを覚える者もいれば、怒りを爆発させるものもいた。

「どうやら、僕等が察した事を予想していたようだね」

「本当にムカつくぅぅぅぅぅ！」

「ふざけた野郎だア！」

「何か方法がねえのかよ！ 誰かが奴のフリをして願い事を叶える演技をするとか……」

「そんな都合の良いことがあるワケないじゃない！」

浜面の発言を聞いてツツコミを入れる御坂であったが、

「成る程、それだ！」

ユーノがある作戦を閃いた。

ライダー・ドーパントこと沢田幸男は、移動用のワゴン車に乗っていた。

「今日で“電波塔の道化師”は休業しようかな」

満足した顔でそう言うが、ラジオからある声が出てきた。

『こんにちは！ 『神都ラジオ』の時間です！ 今回のゲストは、桜ヶ丘高校の軽音部員で結成されたロックバンド・放課後ティータムのギター担当の平沢唯さんです！』

『ど、どうも！ 平沢唯です』

神都の人気ラジオ番組のゲストで、唯が登場していた。

『そう言えば平沢さん、ある人と待ち合わせしてるそうですが、どんな人なんですか？』

『は、はい！ 実は、あの有名な“電波塔の道化師”さんと公園で会う約束をしたんです』

「へえ、 “電波塔の道化師” って何い~~~~~!?」

まさか自分と会う約束をしたという唯の発言に、電波塔の道化師本人は驚きを隠せなかった。

『それは何時頃ですか？』

『はい！ この番組の収録を終えた一時間後です』

『良かったですね』

『はい！』

『という事で、放課後ティータイムのギター担当の平沢唯さんでしたあ〜！』

番組が終わり、慌てだした幸男。

「こ、こうなったら！」

【ライアー】

幸男は、ライアードーパントに変身し、そのまま車を走らせた。

そして一時間後。

「見つけた……」

唯と思われる後姿を見付けたがライアードーパントであったが、

「ヤッホ〜唯ちゃん！ 電波塔の道化師だよ〜ん！」

変な格好に厚化粧をした男が唯の前に現れた。

「嬉しいなあ〜、唯ちゃんが僕に会いに来てくれるなんて……これは何かの運命なんだよ〜ん！」

自分の名前を汚されたライアードーパントは、咄嗟に車から降りてきた。

「ふざけるのもいい加減にしろ貴様あ！ 違うんだ唯ちゃん。私が電波塔の道化師なんだ！！」

唯の下へ駆け寄ったまさにその時であった。

「ちえいさー！」

「んが！」

突如蹴り飛ばされてしまった。

「待ってたわよ、嘘つきドーパント！」

そう言って仁王立ちをしていたのは唯ではなく、彼女に近い髪型に

桜ヶ丘高校の制服を着た御坂と、

「嘘つきも騙されるって事か」

先程の変な格好から厚化粧のみを拭い取った恋次の姿であった。

これを見たライダーパントは、すぐさまコレが何なのかが分かった。

「まさか、罠か!？」

「そつだ」

「アンタが自分の呼び名を汚されたら必ず来ると考えて、ワザと誘い込んだんだ。もう逃げ場はないぜ、ライダーパント! いや、沢田幸男!！」

「因みに唯さんの協力は、ラジオだけよ」

上条達の策にまんまと引っ掛かったライダーパントは、怒りを爆発させる。

「良くも私を騙したな　許さあーん!」

「許さねえのはコツチだ!　騙される側の身にもなりやがれ」

そう言って上条達は、ドライバーを装着した。

「行くぜ皆!」

【JOKER】

「ああ」

【CYCLONE】

「今度は逃がさないわよ」

【JOKER】

「此処までコケにしてくれた借り、返えさせて貰っぜエ！」

【ETERNAL】

「今度こそ決着を着けてやる！」

【ACCEL】

「『『『『『変身！』『』『』『』』』』」

【CYCLONE・JOKER】

【JOKER】

【ETERNAL】

【ACCEL】

仮面ライダーW、ジョーカー、エターナル、そしてアクセルの四人は、ライダーパントと激突するのであった。

「ハア！」

「オラア！」

「ハア！」

ライダー達の隙の無い攻撃に翻弄されるライダーズは、再び『言葉の針』を飛ばす。

「お前達は敵同士だ！」

「効かねえよ！」

しかしWの右手によってその攻撃は阻まれた。

「こづなったら………無敵の必殺技！」

「何！？」

ライアードーパントの奥の手に一瞬驚く四人であったが、

「なぐんてね、嘘だよ〜ん！」

そう言っつて武器を手に取つたライアードーパントは、その武器からエネルギー弾を放つ。

「喰らうかよ！」

Wが右手を盾に打ち消していく。

「くっ、何で効かないんだ!？」

自分の攻撃を無効化するWに驚きを隠せないライアードーパントであったが、

「振るきるぜ！」

そう言っつて、バイクフォームに変形したアクセルの体当たりを喰らい、吹き飛ばされてしまう。

「喰らいやがれエ！」

【HEAT MAXIMUMDRIVE】

ナイフ型武器・エターナルエッジのマキシマムスロットにヒートメモリを差し込み、炎を纏つた斬撃を放つた。

「ガア！」

「今だ！」

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

そのままWとジョーカーは、ジョーカーメモリをマキシマムスロットに差し込み、

「ジョーカーエクストリーム！」

「ライダーキック！」

同時に必殺技を叩き込んだ。

「グアアアアアアアアア！」

喰らったライダードーパントは、爆発し元の沢田幸男に戻った。

そして地面に落ちた和紙に、彼の涙が染み込んだのは言うまでも無い。

「ふう〜、間に合った」

コンサート会場の観客席に着いた上条とユーノ達は、放課後ティータイムのライブを観に来た。

「皆さあ〜ん！ 放課後ティータイムです！」

ギターを持ち、マイクに近づけた口から大声で観客に挨拶する唯のが見えた。

「それじゃあ聞いてください！ 放課後ティータイムで、『フワフワ時間』！！！」

そして、このライブも成功を果たし、会場は大盛り上がりであった。

第8話・Lの話術／ふわふわ時間と騙し撃ち（後書き）

次回、Fの暴走／捕らわれる幻想殺し

第9話・Fの暴走／捕らわれる幻想殺し（前書き）

まさかのあの人が登場！？

第9話：Fの暴走／捕らわれる幻想殺し

「あれ？」

甚平姿の男・浦原喜助が何かの捜していた。

「オカシイツスねえ」

困った顔で頭をかく浦原。

「喜助さん」

すると、浦原の言んでいる店の店員・雨フルルが現れた。

「さっき恐竜が店の外にいたけど……何ですかアレ？」

「え？」

Fの暴走／捕らわれる幻想殺し

神都にある駄菓子屋『浦原商店』。

しかしその実体は、ガイアメモリを対応させたアイテムを開発し、ライダー達を支援する『ガイアメモリアイテム開発工場』である。

「不幸だああああああああああああああああ！！！」

あるモノを受け取りに店を尋ねた上条は、ソレがなくなったと知って絶叫した。

「いや、すみませんね。アレの思考は開発者のあたしも知りませんので」

「ハア、良いよ。浦原さんですら分からないなら……」

そう言って上条は店を後にした。

その様子を少し離れた場所で見っていたルキアと恋次。

「まさか、浦原までいたとはな」

「駄菓子屋を装ったメモリ開発って、まるっきり俺等に近いな」

「そうか、『彼』は逃げ出したのか」

事務所に戻った上条の説明を聞いたユーノは、すぐさま納得する。

すると、買い物で外出していたティアナとスバルが帰ってきた。

「上条さん、手紙が入ってましたよ」

ティアナから渡された封筒を取り、封筒の中身の手紙を見る。

「!？」

そこには、とんでもない内容が書かれていた。

『高町なのはは預かった。返して欲しければ、神都大橋の下の河原に
来い 比留間』

「なのは!？」

「比留間の野郎！」

「これは……誘拐の脅迫状!!！」

「しかもなのはさんを!？」

「クソツタレ！」

上条はそう言ってハードボイルダーに乗り、河原へ向かった。

「オイ、当麻！」

それを見たルキアと恋次は、上条の後を追った。

神都大橋の下にある河原。

そこに比留間兄弟と縄で縛られているのがいた。

「比留間兄弟！」

そこへ上条が現れた。

「当麻君！！！」

「良く来たな幻想殺し」

「テメエ！ 脱獄してたのか！？」

「その通りだ。 伍兵衛」

「ああ！」

【アームズ】

すると伍兵衛は、赤いのガイアメモリを腕のコネクタに差し込んだ。

その瞬間、彼の姿は赤いボディに背中に欠けた剣のような物を付けたドーパントに変わった。

『武器の記憶』を宿すアームズドローパントであった。

「くそ！」

すぐさま上条は、ダブルドライバーを装着し、ジョーカーメモリを構えた。

【JOKER】

無論、ユーノもサイクロンメモリを構える。

【CYCLONE】

「変身！！」

【CYCLONE・JOKER】

仮面ライダーWに変身し、アームズドローパントに立ち向かった。

「うおおおおおおお！」

「ハア！」

攻撃を仕掛けようとしたWであったが、アームズドローパントは右手をマシンガンに変えて弾丸を発射した。

「ガア！」

「不味い！ 『武器の記憶』のを宿すメモリだ。 此処は遠距離戦で決めるよー！」

「よし！」

Wはすぐさまジョーカーメモリをトリガーメモリに替えようとしたが、

「おっと、そこまでだ！」

そう言って喜兵衛が銃口をなのはに向けていた。

「ンフフフフ…… 幻想殺し、この娘の命が欲しかったら変身を解くんだな」

「クツ！」

「どうした？ 変身を解かないのか？」

「……………」

Wはサイクロンメモリに手を当てる。

「（ユーノ、変身を解くフリをしてルナトリガーに変わるぞ）」

そう言ってサイクロンメモリを取り外した。

しかし、その時であった。

「今だ伍兵衛！」

「オラア！」

アームズドローパントは右手の銃口から特殊な粘着弾を撃ち、ダブルドライバーの右スロットに命中させた。

「な!？」

驚きを隠せないWであったが、

「オラア！」

「グアアアアアアア！」

今度はグレネード弾を発射し、喰らったWは強制的に変身がが解けてしまった。

「当麻君！」

「ハハハハハハ！ 嘗て戦った相手の弱点を見抜けんワシじゃないわい!!！」

「か……は………」

血を吐きながら、倒れてしまった上条は、そのまま比留間兄弟に捕まってしまった。

「そんな……………当麻君……………なのは……………」

相棒と恋人を人質にされ、どうすれば良いか分からなくなってしまったユーノ。

「どうすれば……………」

「ユーノさん、しっかりして下さい!」

ティアナとスバルも励ます。

するとその時であった。

『クワァー!』

突如、恐竜の鳴き声のような音声が響いた。

「え?」

声のする方へ顔を向けると、そこには銀色のボディの恐竜型ガジェットが本棚の上に立っていた。

『クワァー!』

「キミは………」

この恐竜型ガジェットの正体は一体何者なのか？

そして、上条となのはの運命はいかに！？

第9話・Fの暴走／捕らわれる幻想殺し（後書き）

次回、Fの暴走／牙の切り札

第10話：Fの暴走／牙の切り札（前書き）

遂にFへの変身の時が！！

第10話：Fの暴走／牙の切り札

恐竜型ガジェットを翡翠色の瞳で見るユーノ。

「……………」

一瞬の戸惑いを感じたが、すぐに答えを出した。

「僕と、戦ってくれるかい？」

『クワァー!!』

果たして、このガジェットの正体は!?

Fの暴走／牙の切り札

とある廃工場。

「くそ、グルグル巻き付けやがって！」

上条となのはは、縄で縛られて捕らわれの身となっていた。

「ゴメン、私が買い物途中で気付けば……」

「……気にすんな、お前のせいじゃねえよ」

謝るなのはに優しく答える上条。

「アイツが……ファングさえあれば……」

「ファング？」

聞きなれない言葉になのはは反応した。

「何ソレ？ 聞いたことないんだけど」

「簡単に言つとWの“第七のメモリ”で、唯一ユーノを基本にした
Wに変身出来る代物だ」

フアングの説明を聞いたのはは驚きを隠せなかった。

「嘘、そんなメモリがあるの！？ でも、何処に？」

「それが、あのメモリはガジェットと一体化したような感じだから、
何処ほつつき歩いてるのが分かんねえんだ」

「え、動くの！？」

“動くガイアメモリ”という言葉に再び驚きを隠せないのは。

「でも……仮にフアングが現れても、ユーノが変身を拒む」

「どうして！？」

今度はユーノが変身を拒む事を知って、驚きを隠せなくなったが、
上条が説明した。

「一年前、ある組織から脱出しようと、初めてフアングで変身した
んだ」

上条は、その時の記憶を遡らせる。

「でも……そんな時の記憶、全然覚えてないんだよな」

「ええ！？」

「だけど、変身を解除した時のユーノの怯えようは忘れられなかった」

（もう………ファングは二度と使わない。アレを使えば、僕が僕でなくなる！）

「暴走するメモリなんだ」

「だから、暫らくあのメモリを知り合いに同じことがないように再調整してもらってたんだけど………逃げられた」

「逃げられたあ！？」

驚くのはに、上条はコクリと首を縦に振った。

翌朝、比留間兄弟が上条の前に現れ、

「ククク……悪く思うなよ幻想殺し。貴様を殺せば、闇社会での俺達の株が上がるんでな」

既に伍兵衛はアームズドローパントに変身し、右手の銃口を彼の眉間に近づけていた。

「最後に何か言いたいことはあるか？」

その言葉に、上条はこう言った。

「後悔する事になるぜ？」

「それがお前の最後の言葉か。悲しい台詞だぜ！」

そう言っアームズドローパントは弾丸を放とうとする。

もうダメだと思った上条であったが、まさにその時であった。

シュバンと何かが突如現れ、

「ガア！」

「な!？」

アームズドローパントを攻撃した。

まさかと思い、上条は真っ直ぐ前を向くと、

「すまない、遅くなった！」

そこには恐竜型ガジェットを肩に乗せたユーノが、ハードボイルダーに乗ってやって来ていた。

「ユーノ！」

「ユーノ君!!！」

ユーノの登場に二人は驚きを隠せなかった。

「兄者、アイツは……」

「幻想殺しの相棒の小僧か……」

「……」

「無論、殺せ！」

兄の指示を受けたアームズドローパントは、戦闘態勢に入った。

「でもよ兄者、奴も変身するんじゃないかねえのか？」

「忘れたのか？ あの小僧は変身の際、身体だけは抜け殻状態になる事を」

「あゝ、そうか。それに、幻想殺しのベルトの右スロットは使い物にならないしな」

誇らしげな比留間兄弟にユーノは普段とは違う一面を見せながらこう言った。

「後悔するなよ……僕はもう知らないぞ」

そう言つて恐竜型ガジェットを右手に乗せた後、そのままガジェットを折り畳むように変形させた。

するとガジェットは、大きな恐竜の頭部のような形状になり、その下に獣の牙をイメージしたFが描かれたガイアメモリが出現する。

それをクルッと回転させながら左手に持ち換え、右手でスイッチを押した。

【FANG】

音声と同時に上条のダブルドライバーの左スロットに差し込まれた

ままのジョーカーメモリが、ユーノのドライバーに転送され、ユーノはそれを奥に差し込んだ。

「まさか…………お前!？」

嫌な予感を感じ取った上条は、すぐさま叫んだ。

「よせ、ユーノ!!!」

上条の叫びも虚しく、ユーノはそのメモリをドライバーに差し込んだ。

「変身!!!」

【FANG・JOKER】

恐竜の鳴き声のような音声とジョーカーメモリの音声が鳴り響き、ユーノの身体は右半身が白で左半身が黒、そして複眼やボディが凶暴さを見せるような姿のWへと変わった。

仮面ライダーW・ファングジョーカーの誕生であった。

「な!？」

「バカな! ガード無視だと!？」

そのままWは、アームズドールパントの顔面を左手で鷲掴みし、容赦の無いパンチの嵐を叩き込んだ。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!！」

「が!？」

「ウオオオオオオオオオオオオ!!！」

さらにそのまま思いつきり投げ飛ばし、バックルにあるファングメモリの鼻先の角部分・カクティカルホーンを弾くと、

【ARM FANG】

右腕の白い刃・アームセイバーが出現し、Wは容赦の無い斬撃を叩き込んだ。

ズバズバと斬られるアームズドールパントも、右手を今度は剣に変えて反撃しようとするが、全く歯が立たない。

「うあああああああ!!！」

「おい、落ち着けユーノ!!！」

左目の点滅と同時に上条の声が発せられた。

なのはも叫ぶが、Wは止まらない。

「よせユーノ！ 落ち着んだ！！」

上条も必死で呼びかけるも、ユーノは全く止まる気配が無い。

「グアアアアアアアアアアアア！」

そのままアームセイバーがなのはごと斬ろうとしたその時、

「止まれ相ぼオオオオオオオオオオオオ！！！」

上条当麻は、ある場所にいた。

とても深く、恐ろしい闇の中であった。

「此処は……………何処だ？」

その時、彼の耳元である声が聞こえた。

「あああああああー!!」

「ユーノ!? まさか此処は……」

ユーノの精神こころの中に自分はいると確認した上条は、闇の中を走り出した。

奥へ奥へと走ると、そこにはうなされているユーノがいた。

「おいユーノ! 俺だ! 当麻だ! 分かるか!?!」

苦しみから解放されるかのように目を覚ましたユーノ。

「ハア……ハア……来てくれると思ってたよ」

その言葉に上条は答える。

「当たり前だろ。俺達は何だ?」

二人は立ち上がり、こう言った。

「二人で一人の仮面ライダー」

その瞬間、深い闇と化していたユーノの精神世界は、美しい草原へと変わった。

「ん……………うあ!？」

目を瞑っていたなのはは瞼を開けると、丁度ギリギリのところであームセイバーが顔の近くにあった。

「なのは、もう安心して」

Wの中のユーノの声も何時もの優しさを見せ、

「ユーノ君……………うん!」

嬉し涙を流しながら頷いた。

「ハア!」

「ガア!」

人質を取り返されたアームセイバーは、吹き飛ばされてしまい、Wも何時もの決め台詞を彼に放った。

「さあ、その幻想をぶち殺す」

完全に正気を取り戻し、迷いの無い戦士の姿勢を見せるWにアームズドローパントは恐怖を覚えてしまう。

「う……………クソオオオオオオ！」

右手を剣に変え、攻撃しようとするが、Wはタクティカルホーンを二回弾いた。

【SHOULDER FANG】

すると右肩の白い刃・ショルダーセイバーが出現し、それを手に取ったWは思いっきり投げつけた。

「ウオオオオオオオ！」

ブーメランの如く投げ飛ばされたショルダーセイバーは、アームズドローパントを斬り付ける。

「グアアアアアアア！」

吹き飛ばされたアームズドローパントにはもう、反撃できる余裕と体力は無い。

「昨日の借りを倍にして返そう」

「メモリブレイクするには、二人の呼吸を合わせないといけねえからな。ファングの必殺技だから……………」
『ファングストライザー』
でどうだ？」

「名前はキミの好きにすると良いよ」

そう言つてWは、タクティカルホーンを三回弾いた。

【FANG・MAXIMUMDRIVE】

右足の刃・マキシマムセイバーが出現し、跳び上がった瞬間に身体を回転させた。

「「フアングストライザー!!!」」

回転しながら接近していくWは、回し蹴りの要領で斬り裂く。

その姿に恐竜の顎のような水色のオーラが敵を噛み砕く光景であった。

「グアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

W・フアングジョーカーの必殺技を喰らったアームズドールパントは爆発し、元の比留間伍兵衛の姿に戻り、メモリも砕けた。

「やったな、相棒」

「キミのお陰だよ、当麻君」

恐怖を感じた喜兵衛は、すぐさま逃げようとするが、

「待て!」

「黒幕のテメエは、このままで返すつもりはねえぜ？」

「ヒッ！」

恋次とルキアに刃を向けられていた。

「二度とこのような事が無いよう……」

「頭の芯まで『恐怖』って奴を叩き込んでやるよ」

二人の放つ殺気に喜兵衛は気絶と同時にその場で倒れてしまった。

その後、比留間兄弟は逮捕され、留置場に送られたのであった。

ファンゲメモリも浦原商店で再調整され、いつでも呼べるようにプログラムされた。

「全く、一時はどうなるかと思ったぜ」

「まあ、事件が解決できただけでも良かったんじゃないかな？」

『クワァー』

「ハア……………それもそうだな」

上条はそう言っつて椅子の背もたれに体重を掛けたが、

「オワツ!?!」

ドスンと倒れてしまった。

「アハハハハ……………大丈夫？」

「不幸だあ〜」

第10話：Fの暴走／牙の切り札（後書き）

遂に、新章突入！

万時屋に現れた一人の女性。

彼女の依頼は、死んだ筈の姉を見つけて欲しいとのこと。

そんな奇妙な依頼を引き受けた上条は、一体のドーパントと遭遇する。

しかし、そのドーパントとの戦いが全ての始まりでもあった。

「どうすれば良いんだ……………」

苦悩に苦しむ上条。

「それでも僕達は、過去を背負わなくちゃいけないんだ！」

相棒を励ますユーノ。

「お前の幻想は、この二人がいる限り、それは不可能だ！！」

そして、神地剣護Ⅱ 仮面ライダーディケイド・参戦！！

「俺達（僕達）は、二人で一人の……………」

「覚えておけ、通りすがりの……………」

「『仮面ライダーだ!!』」

遂に明かされる、Wの誕生の秘密!

今此処に、新たな物語が始まる。

死んだ筈の大切な人が甦ったら……アナタはどうしますか?

仮面ライダーWのanother world story・ピ
ギンズナイト篇、解禁!!

第11話：Dの悪夢／死人還り事件（前書き）

ビギンズナイト篇・開幕！

第11話：Dの悪夢／死人還り事件

今から2年前……即ち『第三次世界大戦』から1年後の出来事。

「ただいま」

忌まわしき戦いから帰還する事ができた上条当麻は、ある人物と出会い、彼の下で働く事になったのだ。

「おう、ジャンプ買って来たか？」

上下が黒い服の上に白を基調とした着物、そして銀髪の天然パーマが特徴の腰に木刀を差した男・坂田銀時。

この『万時屋』のオーナーである。

「つたく、ジャンプなら自分で買いに行けよな」

「良いじゃねえか、買い物ついでだぜ？」

「ハア、不幸だ」

「いや、何でそこでその台詞!？」

上条の発言にキレる銀時であったが、

「銀時、あまり子供に無茶をさせるな」

白を基調にしたスーツにソフト帽を被った40代の男性が静かにそ

う言った。

彼の名は鳴海壮吉。

銀時以上にこの街で頼りにされている人物で、ハードボイルドを貫く男。

当時、上条は彼に憧れを抱いていた。

「こんにちは」

するとなのはとユーノが事務所を訪れていた。

「おいおい、ご両人。随分と見せ付けるじゃねえか！未婚者の銀さんに対する嫌がらせですか？」

「アンタ、どれだけ嫉妬深いんだよ？」

「全くだぜ」

当時、神都の中央図書館の館長を務めていたユーノとなのはは、結婚を間近に控えていた。

しかし、上条は知らなかった。

2年後にあの恐ろしい事件に遭遇する事になるとは……………

Dの悪夢／死人還り事件

「ハッ！」

デスクで眠っていた上条は、すぐさま目を覚ました。

「夢……………か……………」

ハアと溜め息を付くと、

「オイオイ、何溜め息付いてんだよ当麻」

恋次が脇にサッカーボールを抱えて立っていた。

「……………何じゃそれ？」

「秋つつたら、スポーツの秋じゃねえか！！」

「何を言っておる恋次！！」

すると今度は、ペレー帽を被ったルキアがウサギ(?)の絵が描かれたキャンバスを持ちながら叫んだ。

「秋と言ったら、芸術の秋ではないか！！」

「いゝや、どう見たってスポーツの秋だぜ！」

「食欲の秋はダメなの？」

さらにインデックスとアトリが大きめの紙袋に一杯詰まったハンバーガーの一つをほうばり、スバルが10段以上も乗ったアイスクリームを食べながら答えた。

「あのさ、そんな事してる場合じゃないと思うけど……………」

ティアナがそう言おうとしたその時であった。

「すみません、此処『万時屋』ですよね？」

一人の女性が尋ねて来た。

「え〜と、お名前は？」

「丑宮風鈴です」

「丑宮風鈴やとオオオオオオオオオオオオオオ！？」

「あ、いたんだはやて」

「ええ！？ もうツツ」
「む気なしかいな！？」

神出鬼没なはやてであったが、上条は呆れながら切り捨てる。

「それで、依頼は何ですか？」

「しかもスルー！？」

「実は、死んだ姉を捜して欲しいんです」

「ハア？」

どう言う意味かが分からず、全員が啞然となった。

丑宮風鈴うしみやふうりんは、双子の姉・雷鈴らいりんとのユニット『風雷』で18歳の時にデビューを果たした。

その5年後、姉の雷鈴が交通事故に遭い、帰らぬ人となった。

姉の思いを背負いながら一人芸能活動を行う風鈴であったが、ある出来事と遭遇する。

それは一週間前、初の武道館ライブが決まった事で、多くの記者からのインタビューを受けていた。

その時、彼女は自分の目の前でありえない出来事に遭遇する。

それは、死んだ筈の姉が遠くから此方を見ていたのだ。

「!？」

驚いてしまった風鈴は、疲れによる幻覚なのかと考え、一度病院で検査を受けることにした。

しかし医者からは以上はないと言われたが、気になってしまったので事務所を訪れたのであった。

「幻覚だと思うんですけど、でも……気になってしまって」

それを聞いた上条は、そんな彼女を見ながらこう言った。

「分かりました。この依頼、引き受けます」

そう言って事務所を後にしたのであった。

現在上条は、彼女の姉が眠っている墓地にいた。

雷鈴の墓前に、花を添えるためである。

「なんとも善き心の方。見知らぬ死者に花を添えるなんて、こんな良い日に恵まれるとは……………」

墓地が建てられてある教会の神父・デビット賀川は、そう言ってシスターの橘御幸たぢはなみゆきと共に上条に近づいてきたのであった。

「生きている人間に出来る事は、コレくらいしかないからな」

淋しげな表情をする上条は、そう言って墓地を後にした。

聞き込みを開始するが、情報は何処にも入らなかった。

「なあユーノ、コレってあの『死人還り』に関わってるんじゃないのか？」

上条は、スタッグフォンでユーノとコンタクトを取る。

死人還り……それは神都で起きた都市伝説の呼び名で、その名の通り死んだ筈の人間が、同時に姿のまま友人、家族の前に現れるという現象の事である。

「何を言ってるんだい？ 死者が甦るなんて論理上ありえない」

「そりゃ、そうだけどさ……」

相棒の正論に反論が出来ない上条。

だが彼は知らなかった。

この事件こそが、自分とユーノの心の傷を呼び起こす鍵になってしまっことだ。

聞き込みを行って4時間後。

「にしても、死者蘇生なんて本当に出来んのかな？」

「そうだよな」

「つておわあああああ！ フェイト、アンタ居たのかよ！？」

「人をお化けみたいに言うな」

突如後ろから現れたフェイトに上条は驚いてしまう。

その瞬間、冷たい風が吹き出した。

「！？」

上条は振り向くと、そこには髑髏の装飾を付けた大鎌を持つ死神を連想させる怪人・デスドーパントであった。

「フフフフ……私の起こした死人還りはとても満足したかな？」

デスドーパントの言葉を聞いて、上条はダブルドライバーを装着する。

「ヤッパ、ドーパントが絡んでたか。相棒！」

そう言つて上条はジョーカーメモリを構える。

【JOKER】

事務所にいるユーノもサイクロンメモリを構える。

【CYCLONE】

「「変身！」」

【CYCLONE・JOKER】

仮面ライダーWに変身し、デスドーパントに立ち向かう。

「仮面ライダーだったのか！ なら、私に歯向かえぬようにしてやるっ！！」

そう言つて大鎌を構えたのであつた。

「ハッ！ タア！！」

「グッ！」

大鎌を振るうデスドーパントであったが、得物が大きいためかWは簡単にかわす。

「これなら簡単に倒せるな！」

「一気に決めるよ！」

【CYCLONE・TRIGGER】

サイクロントリガーにチェンジしたWはトリガーマグナムの引き金を引いた。

「ハッ！」

「グアアアアア！」

風の弾丸を連続で放たれ、吹き飛ばされるデスドーパントであったが、

「くそ……見せてやる、私の死人還りの力を！」

すぐさま姿を消した。

「くそ、何処に逃げやがった！」

追いかけてようとするWであったが、突如足音が聞こえてきた。

「ん？」

振り向くとそこには、二人の男性がいた。

「な!？」

一人は白を基調としたスーツに帽子を被った40代の男性・鳴海壮吉、もう一人は黒い服の上に羽織った白い着物に腰に木刀を差した銀色の天然パーマの男性・坂田銀時であった。

Wはその二人の名を口にした。

「まさか……銀さん……鳴海さん？」

「そんな、ありえない!？」

驚くWの前で壮吉はロストドライバーを装着し、紫で骸骨の横顔を模したS字の書かれた黒いガイアメモリもスイッチを押した。

【SCULL】

「変身」

帽子を一度脱ぎ取り、メモリを差し込んだスロットを倒した。

【SCULL】

その瞬間、壮吉は骸骨を模した銀色の仮面、黒いボディに白いマフラーを付けた仮面ライダーに変身した。

そしてそのライダーは、壮吉の帽子を額のS字型の傷を隠すように深く被った。

『骸骨の記憶』の戦士・仮面ライダースカルが甦ったのだった。

そして、銀時も愛用の木刀と銀色の刀を構え、二人はWに襲い掛かった。

スカルの格闘技と銀時の剣術により翻弄されるW。

「ガア！」

吹き飛ばされるW。

「クソ！」

【LUNAR・TRIGGER】

ルナトリガーにチェンジしたWは、トリガーマグナムの引き金を引いた。

しかし、スカルは専用の銃型武器・スカルマグナムで弾丸を全て打ち落とした。

「落ち着くんだ当麻君！ 彼等は本人じゃない！」

「けど、鳴海さんはスカルに変身してるし、銀さんだってソウルブレードを持つてるんだぞ！ どう見たって本人じゃねえか！！」

【SCULL MAXIMUMDRIVE】

【SCULL MAXIMUMDRIVE】

取り乱す上条を落ち着かせるユーノであったが、スカルはマグナム、銀時はブレードの柄のスロットにメモリを差し込んでいた。

「それは絶対はない！ 何故なら、銀さんも……鳴海さんも……」

「言っな、ユーノ！」

「二人はもう、死んだんだ!!」

その瞬間、スカルマグナムの銃口とソウルブレードの刀身から放たれた弾丸と斬撃により、

「グアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

『幻想殺し』で打ち消す隙も出来ずにWは吹き飛んでしまった。

変身が強制的に解除され、上条は重傷の身体を強引に起こしていた。

「その程度じゃ、俺の魂は折れねえぜ……………当麻」

銀時と壮吉はそのまま姿を消したのであった。

最後に、デスドローパントは上条にこう言い放った。

「どうだ仮面ライダー！ これで私が、死者を自由自在に操れる事が照明されたであろう。 ハーハハハハハハハハハハ！」

Wがスカルと銀時に圧倒されていた同時刻、

「新たな世界か……」

一人の青年が街を歩いていた。

「ここも『Wの世界』みてえだな」

そう言って周りを見渡していた。

果たして、この青年の正体とは？

「当麻君、入るよ」

そう言って神都署の刑事・笹塚衛士が事務所を訪ねる。

すると上条は、すれ違うように事務所を出ようとしていた。

「ん？」

「悪い笹塚さん。一人にしてくれないか」

とても悲しい顔をして姿を消した上条を見て、疑問を感じる笹塚。

「何があつたんだ？」

「ハハハハハハ！ 気にすること無いツスよ先輩！」

「そうですね！ あのガキは所詮この程度の奴だつたんですから」

そんな彼の気持ちを知らずに罵る後輩の石垣筍と真倉俊。

「……………」

沈黙していた笹塚は、ある封筒をなのは達に渡す。

「何があつたのかは知らないが、彼の居場所は此処しかない。彼は自分で何でもかんでも背負って生きてるようだからね、キミ等が支えてやれよ」

そう言い残し、事務所を後にした。

「え、ちよちよちよちよつと先輩!？」

「置いてかないで下さいよ!…」

無論、石垣と真倉も彼を追うように事務所を後にした。

翌朝、上条は花束を持ちながらある場所へ向かった。

そこはとても小さな無人島で、そこには大きなビルが全焼したかのような後があった。

「……………」

「あれから一年経つんだね」

「ユーノ？ お前どうやって？」

突然現れた相棒に驚く上条であったが、ユーノは浜辺に停めてある水上移動型のハードボイルダーを指差した。

「ここで僕等は、初めてWに変身したんだっただね」

「ああ……………そうだな」

二人は、当時の出来事を遡る。

遂に明かされる、W誕生の秘密。

第11話：Dの悪夢／死人還り事件（後書き）

次回・Wの誕生／ビギンズナイト

第12話：Wの誕生／ビギンスナイト（前書き）

真の序章が始まる

第12話：Wの誕生ノビギンズナイト

上条とユーノは、自分達が始めてWに変身した時の記憶を遡らせる。

何故、二人がWとなったのか？

何故、二人にこの戦いを背負う事になったのか？

遂に明かされる、本当の始まり・ビギンズナイト。

Wの誕生ノビギンズナイト

一年前…即ち『第三次世界大戦』から2年後の出来事。

「ユーノが？」

「ああ、最近連絡が取れねえようなんだ」

「アイツの能力は、連中から見れば喉から手が出るほど欲しいものだ。恐らくは……」

巨大なビルに潜入した上条、銀時、壮吉の三人。

銀時はなのはの依頼、壮吉は神都図書館の司書の依頼でユーノの捜索を頼まれたのである。

「でも……俺がいると、はっきり言って邪魔なんじゃ？」

上条は、自分の不幸体質が他人を巻き込んでしまっんじゃないかと不安に感じるが、

「気にすんな、そんな事ねえよ」

「お前と一緒にいて、俺達が怪我をおった事があるか？」

励ますように二人がそう言った。

「……………でも」

「当麻」

壮吉は上条の肩に手を置き、

「自分を信じろ」

そう言って優しく声を掛けた。

ビルの中央部と思いわしき場所に辿り着いた三人であったが、扉が三つ存在した。

「ここから先は別れて入れと言う事か」

「みてえだな」

「……………」

右から赤、青、黄の色で分けられたを見て、壮吉は答えた。

「俺は赤だ」

「決断早っ!?!」

「男の仕事の8割は決断、それ以外はオマケみたいなもんだからな」

「じゃあ……………俺は青!」

「当麻も!?!」

そう言って銀時は黄色の扉に向かう。

「じゃあ、また後でな」

「うん」

「ああ」

こうして三人は、それぞれ違う扉を開き、先へと進んだ。

く壮吉パートく

鳴海壮吉は赤の扉を開き、その中へ入った。

「随分と静かな場所だな……そう思わないか？」

「あら、気付いてたの？」

そうやって炎を模したボディのドーパント・ヒートドーパントが現れた。

「好みのタイプだけど、此処で殺してあげるわ」

ヒートドーパントは右手に炎を纏いながら接近していく。

「撃つて良いのは撃たれる覚悟のある奴だけだぜ、レディ？」

「!?!」

その瞬間、場の空気が一瞬で変わった。

「ガイアメモリを仕事で使うのは俺の流儀ポリシーに反するが、止む負えん」

壮吉はロストドライバーを装着し、スカルメモリを構えた。

「そのドライバー！？ 何故お前が！？」

【SOUL】

「変身」

【SOUL】

スロットを倒し、仮面ライダースカルに変身し、頭部に帽子を被りながらこう言った。

「さあ、お前の罪を……………数えろ」

スカルとヒートドーナツは、格闘戦による激戦を繰り広げる。

「ハア！」

「クッ！」

ぶつかり合う拳と拳。

しかしヒートドーパントは、右手から火炎弾を放った。

「ハア！」

「無駄だぜ」

しかしスカルはマグナムを抜き、その弾丸で落ち落とした。

「く……………此処は退いた方が良いわね」

そう言ってヒートドーパントは姿を消した。

「……………逃げたか」

変身を解除した壮吉は、すぐさま先へと進んだ。

「銀時パート」

黄色の扉を開けた銀時は、

「おいおい、何者ですかアンタは？」

白いボディに侍のようなデザインの丁髷頭のドーパント・ウエザー
ドーパントが立っていた。

「貴様を殺す。悪く思っなよ」

「やっぱり、こうなるのか」

銀時はソウルブレードを構えながら戦闘態勢に入った。

「ハア！」

「グッ！」

ウエザードーパントの放つ雷撃や吹雪に翻弄される銀時。

「ハハハハハ、これで終わりだ！」

再び雷撃を放ったその時、銀時は素早く後ろに着いた。

「な!？」

「何処見てんだよ」

振り返るウエザードーパントであったが、銀時の斬撃の方が速く、その攻撃で吹き飛ばされる。

「ガア！」

「まだまだ!！」

さらに銀時は素早い剣捌きで、ウエザードーパントを切り裂いた。

「グアアアアアア！」

その場に倒れるウエザードーパントに銀時はこう言い放った。

「悪いが、先を急ぐんでな」

（上条パート）

青の扉を開けた上条当麻の行く手を阻むのは、黄金の甲冑を纏った騎士のようなドーパント・ユートピアドーパントが現れる。

「クソ、イキナリかよ！」

右手を構える上条は、歯を噛み締めながら戦闘態勢に入る。

「喰らえ！」

ユートピアドーパントは、専用のステッキ・理想郷の杖を振り、雷を放つ。

「ッラァ！」

上条は『幻想殺し』の力で打ち消す。

その様子を見ていたユートピアドーパントは、

「『理想郷』の力を持つ私とあらゆる幻想を“殺す”キミの右手…
…まさに似て非なる、似たもの同士の力」

「一緒にすんじゃねえ！」

上条は右手の拳を握りながら接近するが、

「ハッ！」

「ぐあー！」

ユートピアドーパントは斥力を操り、上条を吹き飛ばす。

「ハア……ハア………」

「どうやらキミも、咄嗟の攻撃までは対応できていないようですね」

「クッ………」

立ち上がる上条に、止めをさそうとするユートピアドーパント。

「終わりです」

上条もここまま死ぬのかと考えたまさにその時であった。

バシユンという音と共にユートピアドーパントの腕を弾いた。

「誰だ！」

「おや、すみませうん。その人を死なせるわけにはいかなかった
ものですから」

そこには帽子に甚平姿で下駄を履いた男が現れた。

「上条当麻さんですね？」

「何で？」

「“自分の名前を知っている”って顔してるみたいッスね。それ
はまたの機会に」

男は小さなケースを上条に投げ渡す。

「何だコレ？」

「それは、アナタの運命を大きく変えるかもしれません」

そう言って男はユートピアドーパントに仕込み杖の刀を向けながら
こう言った。

「此処からは、あたしが相手ッス」

「何だと……」

「行って下さい上条さん。此処は任せて下さい」

「でも！」

「良いから早く！」

男の声に上条は戸惑うが、

「ありがとな！ アンタ、名前は!?!」

「浦原喜助………しがない駄菓子屋っス」

浦原に後を任せて上条は先へ向かったのであった。

合流に成功した三人であったが、

「じ……これは!?」

「……………実験室!?」

「酷すぎる!」

沢山の遺体の山を目撃してしまった。

数年前から行方不明になっていた人々である。

「まさか……人体実験!?」

「連中から見りゃ……」

「商品テストだな」

そう言っつて三人は先へと進んだ。

最上階に着いた三人は、そこで実験を行う傭兵達と出くわす。

「何だ貴様！」

「そこどけ雑魚共オオオオオオオオオ！」

「グアアアアアアアアアア！」

銀時の怒涛の攻撃で、傭兵達は吹き飛ばされたのであった。

傭兵達を退けると、

「銀さん！」

今、実験台にされそうなユーノが拘束されていた。

「貴様、邪魔を！」

「うっせエエエエエエエエ！」

研究者と思われる科学者が怒りを露にするが、思いっきり蹴り飛ばされてしまう。

「ブヘア！？」

ユーノを救出する事が出来た三人は、すぐさま脱出を試みるが、パンという音が後ろから聞こえた。

「銀さん！？」

振り返ると、銀時が背中を撃たれて倒れていた。

「銀さん、しっかりして下さい！ 銀さん！」

涙目で叫ぶユーノ。

すると、マスカレイドの軍団が重火器を持って構えていた。

「（くそ……………どうすれば……………）」

戸惑う上条であったが、引き金は引かれた。

しかし、そこには壮吉が二人の盾になるように弾丸を受けながら倒れた。

「鳴海さアアアアアアアアん！」

倒れる壮吉に上条は抱える。

「鳴海さん、しっかり！」

すると壮吉は、上条に自分の帽子とスカルメモリを手渡す。

「後の……………ことは……………任せませ」

「何言っただよ！？ 俺みたいな奴にアンタや銀さんの後を継げないよー！」

今にも泣きそうな上条に、壮吉は優しくこう言った。

「お前は……………お前の道を行け……………」

帽子とメモリを託した壮吉は、そのまま息を引き取った。

「そう……………吉…さん……………」

眠るように息絶えた彼の顔を見て、上条は叫んだ。

「くしょう……………ちく……………しょう……………チクシヨオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

自分が何も出来なかったという罪を悔やむ上条。

しかし、マスカレイドの軍団の銃撃は止まらない。

その時、ユーノは上条が持っていたケースを咄嗟に開け、その中身を彼に見せながらこう言った。

「魔術師と契約する覚悟は、あるかい？」

「え……………」

その言葉を聞いた上条は、無意識にジョーカーメモリを手に取って答えた。

「そんなもん……………決まってるだろ。地獄の底まで付き合ってるよ」

二人は立ち上がりメモリを構えた。

「うおおおおおおおおお！」

二人がメモリをドライバーに装着した瞬間、膨大なエネルギーが放たれ、マスカレイド軍は吹き飛ばされてしまう。

「な………何だよコレ!？」

コレこそが、仮面ライダーW誕生の瞬間であった。

突然変わった自分の姿に戸惑う上条であったが、

「ウワアアアアアアア！」

地面が崩壊し、そのまま落下してしまう。

落ちていくWとユーノの肉体。

しかし、ユーノの肉体は恐竜のような機体が救助していた。

「うおっ」

一番下の階まで落下したW。

「くそ……………どうすれば……………」

「まずは、此处を出よう」

ユーノがそう言うと、Wは変身を解除した。

すると恐竜を手を取ったユーノは、それをガイアメモリに変形させた。

【FANG】

すると、ドライバーに刺さったままのジョーカーメモリは上条の気絶と同時にユーノのドライバーに転送される。

「変身！」

【FANG・JOKER】

その瞬間、今度はユーノの身体が右半身が白で左半身が黒のWに変身する。

仮面ライダーW・ファンゲジョーカーの誕生であった。

暫らく沈黙であったが、

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

突如Wは雄叫びを上げた。

この頃のファンゲジョーカーは“あらゆる敵を排除する”ために開発されていたため、バーサーカー状態となっていた。

マスカレイド軍が集まり、Wを攻撃するが、

【ARM FANG】

「ウオオオオオオオオ!!」

アームセイバーを出現させ、マスカレド達を一掃するW。

「バカな………強すぎる!?!」

「此処は退いた方が良いな」

ユーノピアドーパントとヒートドーパント、そしてウェザードーパントはそう言っただけでその場を後にし、

「がっ!」

Wもまた、残った自我で上条の肉体を担いでその場を後にしたのであった。

後に、ユーノピアドーパントと戦っていた浦原にファンゲメモリを再調整のために預けたのは、その数時間後の話である。

「俺の罪は“目の前の命を救うこと出来なかった”という己の無力だ」

「その罪は、僕も同じさ。僕も、自分を助けてくれた人の死を見届ける事しか出来なかった」

悲しく、忌まわしい過去を振り返る二人であったが、

「知ってるかい？ 実は君でも知らない、もう一つのビギンズナイトがあることを」

「え？」

その言葉に言葉が出ない上条。

それは、壮吉が倒れてしまった同時刻である。

(しっかりしてください！)

銀時の身体を抱きかかえるユーノに、銀時は残りの最後の力を振り絞りながらこう言った。

(ユーノ、お前は……………絶対に生きるよ)

(何言ってるんですか?)

(オメエには、惚れた女を守る……………と言う……………重要な義務が……………あんだからよ……………死ぬな……………よ)

そう言っつて銀時は、ソウルメモリを彼に託し、息を引き取ったのであった。

「銀さん……………」

それを聞いた上条は拳を握り締める。

「当麻君、もう一度聞くとよ。魔術師と契約する覚悟はあるかい？」

あの頃と同じ台詞を聞いて、上条は迷わず答えた。

「決まってるだろ、そんな事。地獄の底まで付き合っつてやるよ」

決意を固めた二人は、強く拳を握り合った。

第12話：Wの誕生／ピギンスナイト（後書き）

次回、Wの覚悟／復活の探偵

第13話：Wの覚悟／復活の探偵（前書き）

遂に復活！

第13話：Wの覚悟／復活の探偵

これまでの“死人還り”を調査した結果、二人はある共通点を見する。

「今までの“死人還り”が発生した場所は、ある場所を中心に起きている」

「しかもその場所は……」

「かなり近い！」

こうして二人はその場所へと向かった。

丑宮風鈴は、姉の墓地が建てられている教会に向かった。

「あの……………」

「何か？」

デビット賀川を尋ねた風鈴であったが、まさにその時であった。

バシユンとスタッグフォンが二人の間に飛び込んだ。

「!?!」

驚く二人であるが、

「やっと見つけたぜ“死人還り”の犯人さんよ」

突如上条とユーノ、さらにインデックスやアトリ達もいた。

「何のことでしょうか？」

戸惑うデビット賀川であるが、上条があるモノを見せる。

それは“死人還り”が起きた場所の特定位置の記された図であった。

「一見何ともないように見えるが、こいつには共通点があるんだ」

「共通点？」

「全て……この教会からそんなに遠く離れていないと言っ事ですよ」

「!？」

「しかも、ガイアメモリの能力を使えば簡単だよな？」

二人にトリックを見破られたデビット賀川は、メモリを取り出し、デスドーパントに変身した。

「良いだろう、再び我が力を見せてやる！」

再び霞の如く消え去ったデスドーパント。

ソレと同時に、

「今度は加減無しだぜ？」

【SKULL】

置くの棺から現れた壮吉が、仮面ライダースカルに変身した。

「さあ、再び俺と戦うか？ 当麻……」

「此処で終わりだな」

上条の元まで近づくスカルと勝ち誇るデスドーパント。

しかし、上条が見せた行動は、意外なモノであった。

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

バキンと右手で思いっきりスカルの顔を殴りつけた。

「な!?!」

全員がそれに驚く。

「俺の知ってる鳴海さんはもういない。 けどな……あの人と銀さんの魂と想いは、心の中で生き続けてるんだ！」

【JOKER】

「だからもう、僕達は迷わない。 この手で、未来を掴んでみせる
」!

【CYCLONE】

上条とユ一ノはメモリを構え、デスドーパントは問い出す。

「貴様等は、一体何なんだ!?!」

その問いに、二人は答えた。

「二人で一人の探偵にして、仮面ライダーだ! 変身!」

【CYCLONE・JOKER】

二人は仮面ライダーWに変身し、スカルに立ち向かったのだった。

「オラア！」

「ぐお！」

Wの一撃で外まで吹き飛ばされたスカルは、立てるのがやっとであった。

「待て、当麻！ 俺が……俺が消えても良いのか！？」

スカルの言葉を聞いたWは、小さく呟いた。

「……本物はどんな時でも命乞いをするような、弱い男じゃなかったぜ！」

【HEAT・JOKER】

炎を纏った拳を強く握り、強烈な一撃を叩き込んだ。

「ウラァ！」

「グアアアアアア！」

吹き飛ばされたスカルの姿が消え、そこにはデスドーパントの姿があった。

「クソ……………」

「諦める。お前の正体は既に分かってる」

【HEAT・TRIGGER】

Wはそう言って、トリガーマグナムの引き金を引いた。

「ガアアアアアア！！！」

高熱の弾丸を喰らったデスドーパント。

しかしその姿も消え、そこにいたのはしよぼいと言って良い程の姿のドーパントであった。

「アンタのメモリの正体は、ダミー……………つまり『擬態の記憶』だ！」

「おのれえ〜」

「シヨボ！？アレが敵かよ！？」

敵の正体を見て、恋次はハッキリそう言った。

「まあ良いさ。お前たちから逃げれば、私は再びバカな信者達の金でゴージャスな生活を送れる」

「聖職者の風上にも置けない台詞なんだよ！」

「全くだ。二人とも、頼むぞ！」

インデックスとルキアの怒りに答えるように、

「当たり前だ」

「勿論！」

「さあ、その幻想をぶち殺す！」

そう言ってトリガーマグナムから弾丸を放つが、

【ファントム】

突如黒いマントを付けた白い仮面のような頭部の怪人・ファントムドールパントが現れた。

「おー！ シスター橘、来てくれたのか！！」

「やっぱりシスターもグルだったか」

「いくらダミーでも、二人に化けることは出来ないからね」

Wは目の前の敵を見ながらスカルと銀時に敗れた時の事を思い出す。いくらダミードーパントでも、二人の人間に化けることは出来ない。即ち共犯者がいると言う事が考えられたが、その答えが目の前に現れたのであった。

だが次の瞬間、ドスとファントムドーパントがダミードーパントをナイフで刺したのである。

「何!？」

突然の事に驚くWであったが、

「な………ぜ?」

ダミードーパントことデビット賀川も疑問に思いながら息絶えた。

「何故殺したか？ そうね……分かり安く言えば、私……元々狂った人間なのよねえ……アハハハハハハハハハ！」

フロントムメモリの毒性にやられたのが、シスター自身の本性なのか、Wは拳を握りながらこう言った。

「だったらまずは、その幻想をぶち殺す！」

「面白い事になってるな」

「!？」

するとWの横から、一人の青年が現れた。

「俺も手伝うぜ、仮面ライダーW」

「貴様、何者だ！」

フロントムドーパントの問いに、青年は答えた。

「神地剣護。 またの名はディケイド……通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！ 変身！」

【KAMEN RIDE DECADE】

その瞬間、ベルトのバックル部にカードを装着した青年・神地剣護は、マゼンタを基調としたボディの戦士に変身した。

世界の破壊者・仮面ライダーディケイドの参戦であった。

ディケイドは、ライドブツカーから一枚のカードを取り出し、ベルト・ディケイドライダーのバックルに差し込んだ。

【FINAL FORM RIDE D O D O D O W】

「ちよつとくすぐったいぞ」

「え？」

するとディケイドは、Wの後ろに回るとセントラルパーテーションに手を突き出し、

「ウオオオオオオオ！？」

Wを二人の仮面ライダーに分けたのだった。

【CYCLONE・CYCLONE】

【JOKER・JOKER】

仮面ライダーWのファイナルフォームライド形態・サイクロンサイクロン&ジョーカージョーカーである。

「これは!?!？」

「一体!?!？」

「コレが俺達の力だ! 行くぜ!!!」

「ああ！」

「勿論さ！」

【FINAL ATTACK RID D O D O D O D O W】

上空へと跳び上がった三人は、強烈なキック『トリプルエクストリーム』を叩き込んだ。

「タアアアアアアアアアア！」

「グアアアアアアアア！」

仮面ライダー三人分の攻撃を受けたファントムドーパントであったが、

「お……………の……………れ……………」

再び立ち上がったのであった。

「まだやれんのかよ!?!」

驚く上条であったが、咄嗟にあることを思い出し、あるモノを取り出した。

「待てよ……………」

それは壮吉から託されたスカルメモリであった。

「当麻君……………」

そう言ってユーノが銀時から託されたソウルメモリを取り出した。

するとWは、ドライバーの右スロットにスカルメモリを、左スロットにソウルメモリを差し込んだのである。

「行くぜ、変身！」

【SKULL・SOUL】

託された二本のメモリ力が共鳴し、Wは白いラインの入った黒い右半身と青いラインが入った白い左半身に変わった。

「何だ、その姿は!？」

驚くフロントムドーパントに、Wは答えた。

「仮面ライダーW………スカルソウルだ」

『骸骨の記憶』と『魂の記憶』を宿す二つのメモリの新たな力が今、解放されたのであった。

新たな姿・スカルソウルに変身したWは、隙の無い容赦無い攻撃を叩き込んだ。

「ハア、タア！」

「グツ！」

ファントムドローパントはナイフを取り出し、攻撃するが、

「ハア！」

ソウルメモリの専用武器・ソウルブレードで防がれてしまう。

「行くぜ！」

高速でブレードを振るい上げるWは華麗な剣捌きで切り裂いた。

「グアア！」

ファントムドローパントも遂に体力の限界が近づいた。

「決めるぜ！」

【SOUL MAXIMUMDRIVE】

メモリを差し込まれたソウルブレードの刀身は、白と黒のエネルギーを纏っていた。

「ソウルスラッシャー」

振り下ろされると同時に刀身から巨大な斬撃が放たれ、

「グアアアアアアアアアアアアアアア！」

ファントムドーパントを倒したのであった。

それを見たディケイドは、

「此処での俺の役目は終わったようだな」

そう言って銀のオーロラと共に姿を消したのであった。

シスター橘は、その後警察に逮捕された。

二人の恩師から託されたメモリを眺めながら、二人はこう言った。

「俺達、あの人達の意志……受け継げるかな？」

「“受け継げるかな”じゃなくて、“受け継ぐ”んだろ？」

「そうだな。行こうぜ、相棒」

「勿論さ、相棒」

因みに丑宮風鈴はあの事件後、二人への感謝を込めたメッセージを歌にし、そのCDが大ヒットしたのだった。

タイトルは『繋がる絆』である。

第13話：Wの覚悟／復活の探偵（後書き）

次回、ストーリーカーはK／依頼人は女教皇様

～W・オリジナルフォーム紹介～

スカルソウル

スカルメモリとソウルメモリの力を宿したWの新たな姿。

右半身は白いラインの入った黒で、左半身は青いラインが入った白になっている。

スカルの驚異的な格闘能力とソウルの剣術が加わったため、現在のWのメモリの中では最強クラスである。

必殺技はソウルブレードの刀身から放たれる黒と白の斬撃・ソウルスラッシャー。

スカルメモリ【SKULL】

『骸骨の記憶』宿したガイアメモリ。

ジョーカーを上回る優れた格闘戦を得意とする。

元々は壮吉が上条に託したのだが、ソウルメモリとしてユーノが所有している。

色は黒。

ソウルメモリ【SOUL】

『魂の記憶』宿したガイアメモリ。

剣術による接近戦優れ、専用武器のソウルブレードの柄にはマキシ
ムスロットが付いている。

元々は銀時がユーノに託したものだが、ボディメモリとして上条が
所有している。

色は白。

第14話：ストーカーはK/依頼人は女教皇様（前書き）

今回はWはおろか、ドーパントは出ません。

大声で叫ぶ男に、恥ずかしさの余り顔が真っ赤になる神裂。

「ちよつとオオオオオオ！ 何やってるんですかアアアアアアアアアアアア！？」
堂々と昼間から泥棒ですかアアアアアアアアアアアア！！」

五和がそう言うと、男はハッキリこう言った。

「お嬢さん、間違いないでくれ！ 俺は泥棒でも、恋泥棒だ！！」

「上手い事言ったつもりですかアアアアアアアアアア！！」

すると神裂は、テーブルに置いてある灰皿を手に持ち、

「お、火織さん。 やつと顔を見れ」

そのまま男の顔面に向かって投げた。

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

建宮と五和は、その様子を見るしかなかった。

ストーリーカーはKノ依頼人は女教皇様

「で……………真つ先に俺を呼んだってことか」

「他に相談できそうな方はいなかったの……………」

神裂の依頼を受けた上条は、恋次とティアナ、そしてルキアと共に
天蘭組屯所を訪れた。

「でもよ、別に断ったんなら良いじゃねえのか？」

恋次がそう言うが、五和がこう言い出した。

「そう言う訳にもいかなかったんです」

「とうとう?。」

「最近では、女教皇様フリエステルが外出してる時や、鍛錬している時も……ま
してやお風呂に入ってる時にも現れて……」

「完全なストーカーだな」

男の好意が遂にストーカー行為となってしまうたど分かった上条は、
恋次に目を向ける。

「恋次。お前、神裂の恋人役出来ねえか?」

「何で俺が!? 元々お前にきた依頼なんだからお前がやれよ!!」

反論する恋次に、ルキアがこう言い出した。

「恋次、貴様最近文句が多いぞ! ワガママ言うなら、今此処で当
麻にバイト代減らしても良いんだぞ?」

「ストーカーめえええええ! この阿散井恋次が成敗してくれるわ
ああああああああ!!」

「……(単純だ、この人)……」

減給で動いた恋次に、神裂達三人は、心の中でそう思った。

「やれるもんならやってみろおおおおおおおおお!」

すると、男が突然現れた。

「ホントにいた!?!」

これにはティアナもツツコミを放った。

「テメエか……自分から現れたと言う事は、ストーカーであることを自覚してるみてえだな」

「人は皆、愛を求めるストーカーよ!」

「勝手に言つな」

二人の会話に入るように、上条はツツコミを放つ。

「ソレよりもお前、さつき親し気に火織さんと話してたな。一体彼女とどう言う関係なんだ?」

それを聞いたルキアは、黒い笑みを浮かべながらこう言った。

「許婚だ」

「は!?!」

「実は恋次と神裂殿は共に結婚を誓った許婚同士でな。あんな事やこんな事という過激で妖艶な大人の関係も持っているのだ。だから諦めた方が身のためだ」

「……って何勝手に設定作つてんだテメエはアアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

「……過激とか、大人の関係とか使わないで下さい! 恥ずかしい

とある河原。

「やはりあんな嘘では無理であったか」

「まあ、咄嗟の嘘だったからな」

「大丈夫でしょうか？」

「そうですね、あの落ち着きようは相当死線を潜り抜けた証拠ですから」

「にしてもあの刺青君、遅いのよ。一体何してんのよ？」

「ああ、さっきトイレに行くって言ってたな」

全く来ない恋次が気になる建宮に、上条は即答で答えた。

一方の恋次はというと……

「さてと、早く行くか」

すると、目の前を歩いた男が財布を落とすのを見て、

「おい、アンタ。 財布落としたぞ」

そう言って財布を持ち主に渡した。

「悪い、助かったぜ」

その人物は、何故か瞳孔が開いた啞え煙草がトレードマークの男であつた。

男が去っていく姿を見た恋次は、すぐに河原へ向かった。

男は失神し、恋次も笑いながらこう言った。

「ダーハハハハハ！ 誰も正々堂々戦ったあ言ってるねえからよ！」
しかしその瞬間、上条とルキアのドロップキックが炸裂した。

「だからってそれはねえだろうが卑怯者！」

「見損なつたぞ恋次！ 男の風上にも置けぬ奴だ！」

「ギヤアアアアアアアアアア！！！」

決闘が終わり、上条達が河原を去った二十分後。

「ん？」

瞳孔が開いた啞え煙草の男・土方十四郎が橋の下の河原で失神する男を見て、彼の名前を呟いた。

「近藤局長？」

神都に存在するテロ対策の警察組織『真選組』局長の情けない姿に
啞然とする副長であった。

第14話：ストーカーはK/依頼人は女教皇様（後書き）

次回、ストーカーはK/鬼の副長VS死神

第15話：ストーカーはK/鬼の副長VS死神（前書き）

遂にこの時が！

第15話：ストーカーはK/鬼の副長VS死神

ある朝、真選組屯所内は大騒ぎであった。

「副長オオオオオオオ！ 局長が女に振られたってホントツスカ！？」

「しかもその女賭けた喧嘩で汚え手を使われたって本当っすか！？」

「女にフラれんのは何時もの事だけど、喧嘩に負けるなんざありえねえ！」

「赤髪の侍ってナニモンですか！？」

自分達の局長たいしょうがやられたという報告を受け、落ち着いてはいられなかった隊士達。

「おい、会議中に騒がしいぞ。大体近藤さんが負けるわけねえだろ。誰だそんな事話したバカは？」

クールに隊士達をフォローする土方であったが、

「沖田隊長が、スピーカーで回ってたんです」

隊士達全員が沖田を指差す。

「俺は土方さんから聞きやした」

「コイツに話した俺がバカだった」

ストーカーはK/鬼の副長VS死神

「斬る？」

「ああ、斬る」

パトロールをしていた土方と沖田は、イキナリ物騒な顔をしていた。

「相手がどうあれ、このままじゃ俺達真選組の面子が丸潰れだ。だからその赤髪の侍を斬る」

「あのですね土方さん。 どの世界にも暗殺を成功させた暗殺者はいないんですぜ？」

「暗殺じゃねえよ、直接斬るんだよ」

その言葉に本気を感じ取った沖田であったが、

「でしたら、赤い髪の野郎を見つけてそいつを隊士達を見せれば納得するんじゃないですかい？」

そう言っつて沖田は、

「んじゃ頼みますぜ、神父の旦那。それと刀も持っつてくだせえ」

「何で僕が？」

天蘭組の一番隊隊長・ステイル「マグヌスをどっからか連れて来た。

「……………ステイル、その刀でソイツの頭をかち割っつてくれ」

ステイルと別れ、再びパトロールを続行する二人。

「それにしても赤い髪の侍なんぞ、本当にいんのかよ?」

「おゝい、オメエ等あゝ。危ねえゝぞ」

「え?」

突然の声に上を見上げる土方。

ドゴオオンという音と共に木材が落ちてきた。

「ウオオオオオオオ!」

驚いてしまい、尻餅をついてしまう土方。

「チツ、惜しい」

それを見ていた沖田は小さく呟いた。

「危ねえじゃねえか!」

「ウルセエな。ちゃんと危ねえって言っただろつが」

「もっとテンション上げろよ!」

「あーあー、悪かったな」

そう言ってヘルメットを取る作業員の顔を見た瞬間、土方は驚きだす。

「お前は!?!」

それは昨日、自分の財布を拾ってくれた男・阿散井恋次であった。

「そう言えば、テメエも赤い髪だったな」

そんな土方とは逆に恋次本人はというと、

「誰だお前？　もしかして大串君？　久しぶりじゃねえか。でも今取り込んでいるから、また後でな」

全く覚えてないようで、そのまま屋根の修理に向かった。

「行っちゃいやしたぜ。　どうしやす、大串君？」

「誰が大串君だよ！　あのヤロウ…人の顔をもう忘れやがって……」

「どうするんですかい？」

「総悟、刀貸せ」

そう言って土方は沖田の刀を持って、恋次が修理している屋根へと向かった。

「　　ったく、何で俺が屋根の修理なんかしなきゃならねんだ」

文句を良いながらも槌を打つのを止めない恋次であったが、

「財布を拾った次は、屋根の修理か？」

そう言つて土方が上つて来た。

「ワケ分かんねえヤローだぜ」

「財布……………あん時の!？」

「やっと思い出したか……………」

そう言つて土方は歩み寄る。

「近藤さんを負かした奴がいるって聞いてたが、まさかテメエか？」

「近藤さん？」

すると土方は沖田の刀を投げ渡した。

「女取り合つた仲なんだろ？　そんなに良い女なのか？　今度俺にも紹介してくれよ」

「お前、あのストーカーゴリラの知り合いか？ 何で来たんだ」

刀を受け取った恋次であったが、その瞬間であった。

ピンゴと呟きながら土方は豪華いに刀を振るった。

それにより恋次は吹き飛ばされた。

「ストーカーだろうがゴリラだろうが、俺達にとっては『真選組』の大切な大将なんだよ」

土方は刀を構えながら、接近していく。

「あの人の顔に泥を塗るような奴がいるなら………たたつ斬る！」

その刃をかわした恋次は、そのまま回し蹴りを叩き込んだ。

「刃物を振り回してんじゃねえ！」

しかし土方も吹き飛ばされる寸前に恋次の方を斬った。

「な!？」

驚く恋次と吹き飛ばされる土方。

「誰かアアアアアア！ 警察呼べ、警察！」

「ククク……俺が警察だよ」

「マジで!？ じゃあ、世の末じゃねえか」

「違えねえ」

しかし土方は、こんな事を考えていた。

「（しかし妙な奴だな……………近藤さんの時は、汚え手を使ったらしいが、そんな素振りは全くねえ。まさかコイツ、俺に気い使ってるのか？）」

すると恋次は、鞘から刀を抜いた。

「（やっとその気になったか。そんじゃ、楽しもうぜ……………命の取り合いを！）」

そしてやる気を出した土方は突進し、

「ラアアアアアアア！」

刀を振り下ろした。

「（取った……………）」

しかし土方が斬ったのは、恋次が首に掛けていた手拭いであった。

「な!？」

驚く土方の間合いに詰め寄った恋次。

「（マズイ……………）」

斬られる……そう確信した土方であったが、パキンと恋次は土方の刀を折った。

「はい、終了っ」と

出血する肩を抑えながら、恋次はその場を去ろうとする。

「待て！」

しかし、それを見た土方に呼び止められた。

「オメエ……俺に情けをかけたつもりか!？」

「情けだあ？ そんなもんにかけるくらいなら、ご飯にかけるわ！」

「じゃあ、何でだ!？」

「オメエが真選組とやらを護ることを大将に誓ったように、俺も戦う事を誓ったんだ」

「誰にだ？」

「誰でもねえ……俺自身の魂にだ」

そのまま立ち去った恋次の背中を見ながら、土方は煙草を一服する。

「悪い、近藤さん。俺も負けちゃったよ」

第15話：ストーカーはK/鬼の副長VS死神（後書き）

次回、キャラ紹介です。

特別篇：神都のR達／ライダー紹介（前書き）

キャラクター紹介です。

特別篇：神都のR達／ライダー紹介

（キャラクター紹介）

御坂美琴／仮面ライダージョーカー

年齢：16歳

作品：とある魔術の禁書目録、とある科学の超電磁砲

能力：超電磁砲^{レールガン}

ランク：S

詳細：常盤台中学出身で、『常盤台の超電磁砲^{レールガン}』の異名を持っている。
た。

気にしていた胸の悩みも解消している。

外見も母の美鈴に近い顔立ちになっている。

^{アクセラレータ}
一方通行／仮面ライダーエターナル

本名：不明

年齢：???歳

作品：とある魔術の禁書目録

能力：一方通行
アクセラレータ

ランク：S

詳細：あらゆる『方向性』ベクトルを操作できる能力を持つため、“科学系”サイエンス最強の特殊者”の異名を持つ。

脳にダメージを負っているため、戦闘時間が限られているが、『最強』の名に恥じない戦闘力を持つ。

言葉には出さないが、上条に対しては理想と憧れを抱いている。

『第三次世界大戦』に足を踏み入れた経験を持つ。

浜面仕上 / 仮面ライダー アクセル

年齢：18歳

作品：とある魔術の禁書目録

能力：不明

ランク：E

詳細：特殊チーム『アイテム』の構成員。

自らを『脇役』と称しているが、戦闘力は高くない方ではない。
地形や武器、そして乗り物扱い方に長けていて、そこから相手の隙
を付く戦法を得意とする。

『第二次世界大戦』に足を踏み入れた経験を持つ。

第16話：改造するCノ人の恨みを買つとメチャクチャ怖い（前書き）

一話完結です。

第16話：改造するCノ人の恨みを買うとメチャクチャ怖い

『それがねえ、昨日牛の様子を見に行ったら、角がドライバーになつてたんだよ』

“牛の角がドライバーになる”という事件をニュースで見っていた恋次とルキアとティアナ。

「そう言えば、当麻とユーノ殿は？」

「仕事だつてさ」

「そう言えば最近あの二人見て無いような……」

すると、テレビの映りが悪くなってしまう。

「オイオイ、何だよ。こりゃ修理が必要じゃねえのか？」

「あ、ドライバーならありますけど……使います？」

そう言つてティアナはプラスドライバー……と一体化した右手の人差し指を見せる。

「」

「」

「エエエエエエエエエエエ！？」

長い沈黙の後、ティアナは自分の指を見て驚愕してしまう。

改造するCノ人の恨みを買つとメチャクチャ怖い

「エエエエエエエエエエエエ！？」

ありえない形となつた自分の指を見て驚愕するティアナ。

「オイオイ………いくら出番欲しいからって、そりゃねえんじやねえのか？」

「んなワケないでしょうがアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

呑気に言う恋次に怒涛のツッコミを放つ。

「コレどうすんのよ！ 幾ら何でも恥ずかしすぎるわー!!」

「まあまあ良いじゃんか、全身がドライバーだったら余計に恥ずかしいぜ？」

そう言っつて恋次はトイレに向かう。

「ティアナ、何か心当たりはないのか？」

無責任すぎる恋次とは違い、冷静に相談を進めるルキアにティアナは記憶を遡った。

「はー!」

「何かあったのか!?」

「じ……………実は……………」

そう言っつてティアナは、昨日の記憶を思い出す。

〈回想〉

それは昨日の夜、風呂に上がったティアナは寝巻きに着替えようとした時である。

「こんばんは……」

「!？」

突然聞き覚えのない声が聞こえたので振り返ったが、そこには誰もいなかった。

「コツチだよ」

そう言われて振り返ると、そこにはドライバーやペンチなどの修理道具を体中に付けたような容貌のドーパントがいた。

「何者!？」

警戒するティアナであったが、ドーパントは突如何かのスプレーを彼女にかけた。

「な!？」

催眠スプレーだったらしく、ティアナはそのまま眠ってしまったの

であった。

〈現在〉

「つまり、そのドーパントが改造を施したというわけか」

冷静に推理するルキア。

すると、スバルが二人の元へ現れた。

「あ……………ルキアさんにティア、おはよう」

「おはようスバ」

二人は振り返ったが、そこでとんでもない光景を目の当たりにする。

「ん、どしたの？」

「（恋次さんのアナログスティックがやられたアアアアアアアアアアアアアアアア！）」

「さあて、次はどいつを狙おうかなあ〜」

修理道具を体中に付けたような容貌のドーパント・カスタマイズド
ーパントは、新たなるターゲットを捜していた。

するとそこへ、上条当麻と相棒のユーノスクライアが現れる。

「坪内地丹だな？」

「ん？ 誰だいキミは？」

「お前の幻想を殺す男だ」

【JOKER】

「行くぜ、相棒」

そう言つて上条はジョーカーメモリを構え、ユーノもサイクロンメモリを構える。

「勿論」

【CYCLONE】

「「変身!」」

ユーノの意識を宿したサイクロンメモリは、上条のダブルドライバに転送され、上条もそれを奥に差し込み、ジョーカーメモリを差し込む。

【CYCLONE・JOKER】

「「さあ、その幻想をぶち殺す!」」

仮面ライダーWは、カスタマイズドローパントと激突するとであった。

一端外に出ることにした恋次達四人。

「犯人はドーパントで、恐らくは『改造の記憶』を宿してる可能性が高いわ」

「だったら、メモリ持つてる奴を片っ端から探し出して血祭りにしたやるしかねえな」

「……………完全に壊れてますよ」

「当たり前だろうが！ コツチはチ コを改造されたんだぞ、チコを！！ お前等に分かるかこの気持ちか！！」

「チ コって言わないで下さいよ大声で！ 聞くだけでも恥ずかしいじゃないですか！！」

とまあ、ある意味で大変な四人であった。

「ハア！」

「クッ！」

スピードを主体としたサイクロンジョーカーの攻撃に翻弄される力スタマイズドーパント。

「クソッ、喰らえ！」

するとプラスドライバー型のミサイルを飛ばしてくるが、

【LUNAR・TRIGGER】

追跡弾を放つルナトリガーの弾丸に破られてしまう。

「そうだ当麻君。ソウルメモリを使うよ」

「よっしゃー！」

するとWは、ソウルメモリを差し込んだ。

【LUNAR・SOUL】

『幻想と魂』の記憶を宿した力、W・ルナソウルにチェンジした。

ルナメモリの幻想の力により、ソウルブレードの刃からエネルギー波が放たれ、そのままカスタマイズドーパントに命中させる。

「まだまだ行くぜ」

【HEAT・SOUL】

今度はヒートソウルにチェンジし、その刀身からは炎が宿されていた。

「ウラァ！」

「ガァ！」

豪快な一撃で薙ぎ払うWの攻撃に驚きを隠せないカスタマイズドーパント。

「今度はサイクロンだ」

【CYCLONE・SOUL】

サイクロンソウルにより、風を纏った刃で攻撃するW。

「オラァ！」

その一振りだけで膨大な風を起こすため、カスタマイズドーパントは動く事ができない

「今度はスカルで行くよ」

「うっし！」

今度はスカルメモリとメタルメモリを差し込んだ。

【SKULL・METAL】

棍棒型武器・メタルシャフトから生まれる不吉の風でカスタマイズ
ドーナントを薙ぎ払う。

「お次はコレだな」

【SKULL・TRIGGER】

さらにスカルトリガーで遠距離攻撃に入る。

ドンドンドンと撃ち込まれるトリガーマグナムの弾丸。

その威力は相当なモノであった。

「どうやら、スカルとトリガーは相性が良いみたいだね」

「まあ、スカル自体もマグナム使ってたからな」

そう言ってWはジョーカーメモリを差し込んだ。

【SKULL・JOKER】

装甲のラインが違うのを除けばボディカラーは同じ黒のスカルジョ
ーカー。

身体能力の上昇を特性に持つ二つもメモリ同士の力によって、隙の
無い格闘戦が可能になった。

「それじゃ、止めと行くぜ」

【CYCLONE・JOKER】

サイクロンジョーカーにチェンジしたWは、ジョーカーメモリをマキシマムスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

緑と黒の竜巻で宙に浮き、そのままドロップキックを叩き込んだ。

「ジョーカーエクストリーム!!」

切り離された半身が一撃ずつキックを叩き込んだ。

「グアアアアアアアアアアア！」

カスタマイズドーナツは爆発し、元の姿である眼鏡の少年・坪内地丹へと戻ったが、

「ん、恋次？」

偶々恋次達四人と遭遇した。

「成る程………テメエが元凶か………」

異常なまでの殺気を放つ恋次に地丹は、

「すみませんでしたアアアアアアアアア！」

とても綺麗な土下座で謝るが、

「許すか」のやるオオオオオオオオ！」

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

袋叩きにされたのであった。

第16話：改造するCノ人の恨みを買つとメチャクチャ怖い（後書き）

次回、忍び寄るVノ幽霊大騒動？

第17話：忍び寄るV / 幽霊大騒動？（前書き）

真選組屯所でとんでもない事が！

第17話：忍び寄るV／幽霊大騒動？

「あれは、蚊がたくさん飛んでいた暑い夜だったね」

隊士の一人・稲山が一同に怪談話をしていた。

「俺、友達と花火やってて、夢中になりすぎて夜になっちゃったんだよ」

話を聞いた隊士の一人ひとりが震えだしてしまう。

「すぐに帰ろうとしたら、赤い着物を着ていた女にあったんだ。

それで“何やってるのこんな時間に”って聞いたら、その女……二ヤツと笑って……………」

そして物語は終盤に差し掛かろうとしたその時、

「マヨネーズが足りないんだけどオオオオオ！」

「『ギヤアアアアアアアアアアアア！』」

後ろから土方の声がしたのであった。

忍び寄るV / 幽霊大騒動？

隊士の一人が明かりを点ける。

「副長、何するんですか！ 大切なオチを！！」

「知るか、マヨネーズが切れたんだよ。 買ったけって言っただろ
うが、焼きそばが台無しじゃねえか」

文句を言う隊士に土方は、マヨネーズたっぷりの焼きそばが盛られた皿を彼等に見せる。

「もう、十分かかってるじゃねえか！」

「何だよソレ、最早焼きそばじゃねえよ！ 黄色い奴だよ！！」

たっぷりかけているにも拘らずまだマヨが足りないと言う土方にツッコミを入れる隊士達であるが、

「局長！」

「へ？」

彼等に囲まれるように近藤が泡を吹いて気絶していた。

「大変だアアアアアアアアアア、局長がアアアアアアアアアア！」

「マヨネーズで気絶した！」

「最悪だアアアアアアアアアア！」

騒ぐ隊士達を無視して、土方は隣の部屋に向かう。

「下らなねえ、どいつもコイツも怪談何ぎにはまりやがって……………」

煙草を吸いながら焼きそばに箸を伸ばす土方。

「幽霊何ざいてたまるかよ」

すると、蚊の羽音が耳元で聞こえた。

「何だあ？ 随分と蚊が多いじゃねえか」

だが、その時であった。

コーン、コーンと何かを木槌で打つ音が聞こえたのであった。

「死ねえ〜、死ねえ〜土方ア〜。お前頼むから死んでくれよお〜」

「（まさか……………）」

そう思いながら土方は、襖を開けるとそこには、

「し
」

「……………」

白装束に火の点いた蠟燭を頭に巻いた鉢巻に差し込んだ沖田が、何かを後ろに隠しながら立っていた。

「何やってるんだ、こんな時間に？」

「じよ……………ジヨギング」

「嘘付くんじゃねエエエエエエエ！ そんな頭で走ったら、火達磨になるわ！ 儀式だろ！ 俺を抹殺するための儀式を開いていただろー！！」

「ハア、自意識過剰なひとだあ。 そんなんじゃ、ノイローゼになりますぜい？」

「何を！」

自分を呪おうとする沖田にキレル土方であったが、

「!?!?」

突如、塀の方から気配を感じ取った。

「どうしたんでい、土方さん？」

「お前………何か感じたか？」

「いや」

その時であった。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア!」

「!?!?!?」

突如、隊士達の悲鳴が聞こえたのであった。

翌朝、うなされる隊士達を見ながら土方と沖田は呆れていた。

「ハア、これで20人でさあ。まさか此処までいくたあ思いませ
んでした」

「まったく、冗談じゃねえぞ。天下の真選組が、幽霊にやられたな
んて知られたら、笑いもんだぞ！」

すると近藤は力強くこう言った。

「トシ、俺は違うぞ。きつとマヨネーズにやられたんだ！」

「余計言えるか！」

すると、沖田がこんな事を言い出した。

「もしかして、稲山さんの怪談に登場した赤い着物の女じゃないで
すかい？」

「んなワケねえだろ」

「幽霊を甘く見ると痛い目に遭うぞトシ。きつとこの屋敷は呪わ
れてるんだ」

「下らねえ、幽霊なんかいるワケ……………」

否定する土方であったが、昨夜の出来事を思い出す。

「いや、ナイナイ」

すると、山崎がある人物を連れて来た。

「局長、連れてきました」

そう言って果てしなく怪しいの四人を連れて来たのであった。

「何だコイツ等？」

「拝み屋だよトシ。『グループ』の紹介で、幽霊を退治してくれるそうなんだ」

そう言って近藤が紹介した。

「……………怪しい」

「ご心配なく、我々にかかれば怖いもの無しです」

顔をターバンで巻いた男がそう言った。

「ホントかよ？」

「勿論だよ」

「……………」

しかし同じ拝み屋の三人は沈黙であった。

「おい、お前等からも何か言えよ！」

「いや、別に何も無いのだが」

「右に同じ」

「私も」

グルグル眼鏡の女性とサングラスの女性、そして笠を被ったマスクの女性はテンションが少なかつた。

「良いから何か言えよ！」

男がそう言うが、

「ウルサアアアアアアアイ！」

グルグル眼鏡の女性のパンチをモロに喰らう。

「グハア！」

「ちょっと、落ち着いて下さい！」

「そうですね！ 頭冷やしてくださいよ！！」

「黙れ！ こんな茶番劇に付き合えるか！！」

暴れようとするグルグル眼鏡の女性を抑える他二人であったが、眼鏡や笠が取れてしまい、素顔が晒されて手仕舞う。

「あ」

「しまった」

「げっ!？」

その正体は朽木ルキア、ティアナ・ランスター、スバル・ナカジマの三人と、気絶している阿散井恋次であった。

「信頼できる奴、連れて来たぜ」

そう言って一方通行はアクセアラレータ番外固体と共に、上条当麻とユーノ・スクライア、インデックスとアトリを連れてくる。

「あれ、何で恋次達が此処にいんの」

正体がばれた恋次達四人は、逆さ吊りにされてしまう。

「悪気はなかったんです」

「仕事もなかったんで……」

「言いだしっぺは恋次でな、我々は無実だ」

「フザケンじゃねえよ！ テメエ等だけ助かりたいなんてそうはいかねえよ！」

弁解するルキア達三人にキレル恋次。

「分かりやした。刺青の旦那、コレを鼻から飲んで下させい。それで水に流しますぜ」

そう言つて沖田は山葵醤油を恋次の鼻腔に流し込む。

「イギヤアアアアアアアアア！ キツツ！ 鼻キツツ！ マジで止めて！…！」

「うわぁ……………」

余りの光景に青ざめるティアナとスバル。

「んじゃ、そつちのお姉さん方は下の口で飲んで貰うね」

「「え？」」

そう言つて番外固^{ミサカワースト}体は、二人の下半身を集中的に弄つた。

特に股間を強調的に。

「ちょッ、何すんの！？／／／／」

「やめつ　　んあ／／／／」

「おーおー、なかなか良い声で鳴くじゃないの　　んじゃもつと気持ち良くしてあげる　　」

徐々にエスカレートしていき、ティアナもスバルも感じていく。

「ああ、ダメ……も……これ以上は／／／／」

「私も……もう……ダメえ／／／／」

「ウホ　　」

そんな光景を見た恋次は興奮してしまい、男のバベルの塔が立つてしまつ。

「どつやら興奮しちまつてるみたいですね。　　んじゃ、そろそろシメといきますか」

そう言つて黒い笑みを浮かべる沖田は、恋次のナニをガシツと掴んだ。

「え……」

顔を青ざめる恋次に構わず。

「えい」

ボキンとナニをへし折る沖田。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ナニを折られた恋次は、暫らく気を失った。

「……………殺される」

それを見ていたルキアはそう呟いた。

それを青ざめながら見ていた近藤と土方、そして上条と一方通行。
アクセアラレータ

「おいトシ、そろそろ降ろしてやれよ。いい加減にしないと、総

悟がSに目覚める」

「なあ一方通行、アクセアラレータそろそろ助けてくれねえかな？　ここままだとアイツ、Sに目覚めるぞ？」

近藤と上条の問いに、土方と一方通行はこう言った。
アクセアラレータ

「何言ってるんだよ。アイツはサディスティック星からやって来た王子だぞ？」

「そいつア、無理だな。奴ア、『シスターズ妹達』最強のドS王女だぞ？」

「もう（オ）、手遅れだ」

やっとの事で降ろされた四人。

「頭がガンガンする」

「うう、パンツとズボンが濡れちゃったあ、／＼／＼／」

「もう、お嫁に行けない／＼／」

「……………」

頭を抑えるルキア、顔を真っ赤にするティアナとスバル、そしてナニをやられて泡を吹く恋次。

「本来なら此処で逮捕するところだが、生憎テメエ等と関わってるほど暇じゃねえんだ。消えろ」

土方が四人にそう言うと、番外固ミサカワースト体が嘲笑つかのようにこう言った。

「え、何？ お化けが怖くて、トイレに行けないの？ だったらミサカが連れてってあげようか？」

「武士を愚弄するかアアアアア！」

それを聞いて怒りを露にした近藤であったが、

「トイレの前まで、お願いします！」

思いつきりお辞儀をして頼んだ。

「お願いするんかいイイイイイイイイイイイ！」

これにはツッコミをせざる終えない土方。

「いやあ、今朝から我慢してたんだ。でも怖くてな」

「ほら行くよ」

「ハイ！」

こうして、ミサカワースト番外固体と共にトイレに向かう近藤であった。

「おイイイイイ、アンタそれで良いのか！？ アンタの人生、ソレで良いのかオイ！？」

ツッコむ土方であったが、すぐに上条達に振り向いた。

因みに恋次はナニが回復したため、なんとか立ち上がった。

「お前等……………」この事は誰にも言わないでくんない？ 頭下げるから」

「何かヤバそオな状況だが、大丈夫かア？」

「まったく情けねえよ。 幽霊相手にここまで隊が乱れるたあ……………」

土方は腕を組みながらこう言い出す。

「まあ、相手に実体がありや、刀で何とかなるんだが……………無しとくればお手上げだ」

「何だ、お前信じてるのかよ幽霊なんて？ 痛い痛い、痛いよお母さん。 此处に頭打ってる人がいるよ」

それを聞いた恋次は、ワザとらしく言うが、

「死神がソレ言ったら不味いだろ？」

ルキアがビシッとツツコミを入れた。

「テメエ……………何時か殺すからな」

流石に血管が浮き出るほど怒る土方であったが、

「まさか、土方さんも見たんですかい？ 『赤衣着物の女』」

沖田の問いに土方はこう言った。

「分からねえ。だが妙なモンの気配を感じた。アリヤ人間のもんじゃないかった」

それを聞いた恋次と沖田は、

「痛い痛い、痛いよお父さん」

「絆創膏持って来て。出来るだけ大きな人、包み込めるくらいの」

「お前等打ち合わせでもしたのか！」

見事な連携を見せ、土方はそれにキレる。

『赤衣着物の女』という言葉にユーノは、何かを思い出した。

「『赤衣着物の女』……そう言えば、図書館の本にそんな怪談が載ってましたね」

「え？」

すると、ユーノは『赤衣着物の女』の怪談について語りだした。

「夕焼け時に、子供が一人で神社で遊んでいたら……誰も居ないハズの賽銭箱の前に、赤衣着物の女がいたんだって。それで、何やってるんだって聞いたたら」

「ギヤアアアアアアアアアア！」

「な!？」

物語の終盤を言おうとしたその時、近藤の叫び声があった。

「オッサン、どうしたの？」

個室トイレのドアをノックをするミサカワースト番外固体であったが、返事が返ってこない。

「オイ、どオした！」

「オッサンが返事しないの」

「何！？」

「ドケドケえ！」

土方はすぐにドアを蹴る破るとそこには、

「……………」

「何でそうなるの？」

便器に頭を突っ込んで逆立ちになっている近藤がいた。

第17話：忍び寄るV / 幽霊大騒動？（後書き）

次回、忍び寄るV / 似たもの同士？

第18話：忍び寄るV/似たもの同士？（前書き）

果たして、幽霊の正体は？

第18話：忍び寄るVノ似たもの同士？

その夜、近藤の寝室にいた一同。

「あ……赤い着物の女が来る……コツチに来る……」

うなされている近藤を見て沖田と番外固ミサカワースト体はこう言った。

「近藤さん、見苦しいですぜい。良い齡こいて寝言何ぞ」

「そつだよ、何ならミサカ達ミサカワーストが楽にしようか？」

近藤の首を絞める沖田と鼻を思いつきり引つ張る番外固ミサカワースト体。

こいつ等トンでもない程相性が良いな、オイ！

そんな彼等をスルーし、恋次と土方はこんな事を言い出す。

「こりゃアレだ。昔泣かした女の夢見てるんだ」

「近藤さんは女に泣かされても、泣かした事はねえぞ」

「じゃあアレだ。昔オメエが泣かした女の夢見てるんだ」

「俺はそんな性質の悪い女と付き合った経験はねえ」

「じゃあ、何だよ？」

「そんなの知るか！」

すると一方通行アクセアレータがこんな事を言い出す。

「だがよオ、この建物内に何かがいるって事は間違いないエな」

忍び寄るV / 似たもの同士？

「まさか……本当に幽霊が？」

少し怯えるスバルに、恋次はすぐさまこう言った。

「下らなねえ、んなモンがいるわけねえだろうが」

「だから、死神がソレ言ったら不味いであろう」

「ほら行くぞ」

ルキアのツツコミを無視して恋次はティアナとスバルの手を握る。

「恋次さん、何ですかコレ？」

ティアナに問われた恋次は一瞬びくりとしながらこう言った。

「な………何って、オメエ等が怖がるかも知れねえから、手エ握ってやってんだよ」

「恋次さんの手、汗でヌルヌルですよ」

「何言ってるんだよ！」

徐々に慌てだす恋次を見て、一度顔を見合わせた上条と一方通行は
サラッとこう言った。アクセアレータ

「あ、赤衣着物の女が」

ドーンと恋次は押入れの中に潜りだした。

「恋次さん、何やってるんですか？」

「あ……いや、穿界門の入り口が………」

ユーノの問いに慌てて答える恋次であるが、ルキアと番外固体は意ミサカワースト地悪な顔でこう言った。

「恋次、貴様さてはあゝ（棒読み）」

「ええゝ、ミサカ超信じらんなあゝい（棒読み）」

「何言ってるんだよ！ 間違いに決まってるだろ！！」

そんな恋次を見ていた沖田であったが、

「土方さん、この旦那 　ん？」

大きな壺の中に上半身だけを隠す土方の姿を見た。

「土方さん、何やってんですかい？」

「あ、いや………マヨネーズ王国の入り口が………」

言い訳をする土方と恋次に、その場の全員が冷たい目で見ていた。

なお、ルキアと沖田と番外固体ミサカワーストは黒い笑みを浮かべていたが、

「待て待て違う！ コイツはそうかもしれねえけど、俺は違うぞ！」

「ビビッてんのはオメエだろ！ 俺はアレだ、胎内回帰願望があるだけだ！！」

大人気ない言い訳をする二人を見ながら、一方通行がこう言った。
アクセラレータ

「分かった分かった、分かりましたア。 穿界門でもマヨネーズ王国でも何処にでも行けよ」

「何だそのさげすんだ目は！」

するとその時であった。

「！？」

上条達九人は、二人の後ろを見て驚愕した。

「おい……」

「何だよ……」

「ウワアアアアアアア！」

「あ、待て二人とも！」

「……………」

出て行くように逃げるスバルとティアナと二人を追い掛けるルキアと無言で追い掛ける沖田と番外固体。
ミサカワースト

残ったのは上条とユーノとインデックスとアトリに一方通行、アクセアレータそして恋次と土方であった。

「　　ったく、手の込んだ悪戯を」

「コレだからガキは……」

そう言っつて二人は後ろを振り向いた。

「　　引つ掛かるかってんだよ」「　　」

しかしそこには、赤い着物の女がいた。

「　　」……「こんばんは」

全力疾走で走るルキア達五人。

「見ちゃった！ 本当に見ちゃったよ！！」

「上条さあ〜ん！」

「奴等の事は忘れる、もうダメだ！」

すると、ドガンという音が後ろから聞こえたので、ティアナは振り向くと恋次と土方が走ってきた。

「切り抜けた？」

しかし良く見ると、

「ウソ……背負ってるウウウウウウ！ 何か女の人背負ってるんだけどオオオオオオオオオオ！！」

そんな五人を追い掛ける恋次と土方。

「オイイイイイイイ！ 何で逃げてんだよオメエ等アアアアアアアアア！」

「あれ、何か俺の背中重くねえ！？ 何か重くねえか！？」

「知らん！ 俺は知らんぞ！」

「いや、マジで重いんだって！ ちょっと見てくれない！？」

「何で俺が！」

「良いだろうが別に！」

「よし分かった。 “セーの” で同時に振り向くぞ、良いな！」

「裏切んなよ、お前絶対裏切んなよ!!！」

二人は一度止まると後ろを振り向いた。

「「セーの!!！」

そこには、赤い着物の女がいた。

「「……………こんばんは」

逃げ切れた五人は、物置小屋にいた。

「まさか……………本当に幽霊がいたなんて」

怯えるティアナであったが、

「しめたぜ、コレで副長の座は俺のもんでい」

「フツ、恋次め。死神のくせに幽霊を恐れるとはな」

「ちえ〜ミサカ、一方通行のビビる顔が見たかったなあ〜」
アクセアラレータ

「言ってる場合か!」

緊張感の無い台詞を吐く沖田とルキアと番外固体にツツコミを入れた。

「でもティアあ〜、何であんなのがいるのお〜」

涙目でティアナにしがみ付くスバル。

すると三人が、こっぴ言い出した。

「実は前に、土方さんを亡き者にするために……」

「確か以前、恋次の腰を抜かせる為に……」

「そう言えばミサカ、一方通行に赤っ恥かかせるために……」
アクセアラレータ

「」「外法で妖魔を呼び出そうとした事があつただっけ。ありや、もしかしたらその時の……」「」「」

「アンタ等どんだけ腹ん中真っ黒なのオオオオオオオオオオオオ
!?!」

その腹黒さに怒涛のツッコミを入れたティアナであった。

ブンブンと跳ぶ蚊の羽の音。

「ウルセエんだよブンブンよ!!!」

そう言つて頭に巻いた鉢巻に木の枝を差した恋次と、池に潜つていた土方が出てきた。

「ん?」

「何だ? お前生きてたのか?」

「悪運の強え野郎だな」

そう言つて大害に睨み合う二人。

「やっぱアレ効いたな。 実はあん時、あの野郎を睨み返してたん

だよ

「ほざけ、俺なんかずっと奴をつねってた」

「小せえんだよ、やることが！」

その瞬間、恋次が隠れていた茂みから何かが出てきた。

ザパーンと池に潜った二人であったが、出てきたのはカエルであった。

「さ、さあ〜て。水浴びも終わったし、そろそろ反撃でも行くかなあ〜」

「おい、震えてんぞ」

「な、何言ってるんだよ？俺がびびるワケねえじゃん！」

「ほう、そうかい？だったら此処であの時の借りを返してやろうか？」

口論する二人であったが、耳元でバサバサと音が聞こえ、

「ウルセエんだよさつきから！」

そう言っ上を見上げると、そこにはコウモリのような異形が跳んでいた。

それはまるで、西洋の妖怪・ヴァンパイアのような姿であった。

近藤の部屋から、隊士達が寝ている部屋に向かった上条達五人。

「思ったとおりだ」

「この人も、この人も……」

「幽霊にやられた人達は、全員動物に噛まれた様な傷があるんだよ」

「て事ア……アレは……」

「幽霊じゃない、ドーパント」

今回の事件がドーパントの犯行だと確信し、上条と一方通行はドラ
イバーを装着する。

「まったく、面倒臭えぜ」

「全くだなア」

「同感だね」

【CYCLONE】

【JOKER】

【ETERNAL】

「」「」「」
「变身!」

【CYCLONE・JOKER】

【ETERNAL】

こうして、仮面ライダーWとエターナルは、倒すべき敵の元へ向かった。

一方、土方と恋次は唾然としていた。

「シャアアアアアアアア！」

ヴァンパイアのような怪人・ヴァンパイアドーパントに驚いてしま
う。

「ななななななな何だありやアアアアア！」

「しししし知るわけねえだろうがアアアアアアア！」

「まままままさかお前、びびびびびびびビッてんのおおおお
おおおおおお！！」

「びびびびびびびびびビビるワケねえだろうが！」

「じよじよじよじよじよ上等じゃねえか！」

完全にビビッてる二人であったが、

【LUNAR・TRIGGER】

ルナトリガーにチェンジしたWの弾丸が、ヴァンパイアドーパント
に命中した。

「オラア！」

さらにエターナルが追い討ちを仕掛ける。

攻撃を喰らったヴァンパイアドーパントは地面へと落ちた。

「クッ！」

立ち上がるヴァンパイアドーパントにWとエターナルは戦闘態勢に入った。

「「さあ、その幻想をぶち殺す！」」

「さあ、地獄を楽しめ！」

【ACCEL】

エターナルはアクセルメモリをナイフ型武器・エターナルエッジのマキシマムスロットに差し込み、

【SKULL・JOKER】

Wはスカルジョーカーにチェンジした後、ジョーカーメモリをマキシマムスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

【ACCEL MAXIMUMDRIVE】

アクセルの『加速』の力で急接近したエターナルは、ヴァンパイアドーパントを斬りつけた後、一端後ろに下がり、Wは半身を分裂させる。

分裂と同時にスカルサイドから出現した紫色で髑髏を象ったエネルギー状の球体を三つ出現させ、

「ジョーカーシュート!!」

各半身で回転しながら一つずつ蹴り飛ばし、最後に元に戻ると同時にサッカーの要領で三つ目を蹴る飛ばした。

「オラア！」

「ゲアアアアアアアアア！」

ヴァンパイアドーパントは爆発し、元の姿である赤い着物の女に戻った。

翌日、女は真選組に逆さ吊りにされていた。

「あの、本当にすみマセンでした。実は私、人々で言う『吸血鬼の記憶』を宿したメモリを持ってまして、以前上司にセクハラされた鬱憤を晴らすためにメモリを買ったんですけど、でも血を飲んだら病み付きになりました、本当にすみマセンでした……湯！」

「すみません、その顔の影強くすんの止めて貰いません？」

そんな状況を見ていた土方と恋次。

「言っておくが、報酬はやんねえからな！」

「んだとコラ、一緒に退治してやっただろうが！」

「退治したのは仮面ライダーであって、オメエじゃねえだろうが！」

「恋次、そろそろ帰るぞ　　って、二人して何しているのだ？」

襖を開けたルキアが地面に顔を伏せている土方と恋次にそう言つと、二人はこう言つた。

「「いや、コンタクト落とした」」

第18話：忍び寄るV／似たもの同士？（後書き）

次回、Wの呪い／怨霊車

第19話：Vの呪い／復讐心と怨霊車とメタルのライダー（前書き）

別のライダーも登場です

あとサブタイトルは変えています。

第19話：Vの呪い／復讐心と怨霊車とメダルのライダー

それは、一週間前に遡る。

一人の女性が、ひき逃げ事故に遭ってしまふ。

駆けつけた彼女の弟が、その身体を抱きかかえる。

「姉さん！　姉さアアアアアアアアアアん！」

目が覚めない姉を抱えながら、怒りを露にする青年。

それが、全ての始まりだった。

「その欲望、解放してやる」

Vの呪い／復讐心と怨霊車とメダルのライダー

それから一週間後。

「ヘックシユン」

風邪によるくしゃみが止まらないインデックス。

「37.9度……今衛宮先輩が粥作ってくれてるから、少し待つて
る」

「そつするかも」

「当麻、風邪薬買ってきたよ」

「悪いな」

「トウマ、水枕を持ってきました」

インデックスの看病を行う一同。

その中に恋次達から見れば、全く知らない人物がいた。

「インデックス、お粥出来たぞ」

お粥の入った鍋を運ぶ青年・衛宮士郎。

上条とは学年的に先輩後輩の関係で、マジックアビリティ魔術系特殊者のDランク能力者である。

白いブラウスに青いスカートを着た金髪の少女はセイバー。

士郎のパートナーで、真面目な性格である。

「それにしてもこの雨、嵐でも呼んでくるんあねえか？」

そう言っただけでアイスキャンディーをほっぺに貼る金髪の青年・アークは、窓の外を見ながらそう言った。

彼は800年の封印が解かれた怪人『グリード』の一人であるが、ある経緯で士郎と行動を共にしている。

すると、突如電話が鳴り出す。

「はい此方『万時屋』ですけど」

ティアナは受話器を取り、耳に当てる。

「少々お待ちください。上条さん、電話です」

「ん？ もしもし、お電」

『助けてくれ！ 警察でも取り合って貰えない事件を担当してるんだろ！』

「落ち着いて下さい。今、何処にいるんですか？」

『港町の五番倉庫だ！ 早く来てくれ！』

そう言っつて相手は電話を切った。

受話器を電話に戻し、上条は出かける準備を行う

「俺も行くのか？ 何か手伝える事は？」

士郎がそう言っつと、

「じゃあ、インデックスの看病を頼みます」

そう言っつて事務所を後にしたのであった。

港町の五番倉庫に向かった上条は、依頼人らしき人物と出会う。

「遅えよ！ 何やてるんだ！！」

怒鳴る男であるが、その直後であった。

真っ黒な車が突撃してきたのである。

「何だありゃ！」

「気タアアアアアアアア！」

男は逃げようとするが、車は追いかけていく。

「おわッ！」

上条を素通りした車は、男の身体を擦り抜けたのであった。

「な！？」

驚く上条であったが、男が倒れてしまう。

「おい、しつかりしろ！」

男を抱える上条であるが、既に息絶えていた。

「マジかよ……………」

警察に連絡した上条は、取調べを受けていた。

「万時屋！ 何で殺人を犯した！！」

石垣と真倉が尋問するが、上条は呆れてしまう。

「あのなあ、上条さんは事故の瞬間を目撃したと言いましたよ」

「ああ、そうかい！」

「でもな……ガイシャの体からは、ソレらしい外傷は見当たらないぞぞぞ！」

「あ・の・な！ 人の話を最後まで聞くのが警察だろうが！ あんた等みたいな奴がいるからこの国は平和じゃないんだぞ！」

「何だと！」

「喧嘩売ってんのか！！」

すると、取調室に一人の女性が入ってきた。

「ああ！ んだガキ！！」

「此処は遊び場じゃないんだぞ！！」

石垣と真倉が怒鳴り散らす、女性はあるモノを見せた。

「『神都警察署警視』の八神はやてです」

自身の警察手帳を見せると二人は驚いてしまう。

「し、失礼でした」

「えーえーどうせガキ扱いされますよ！ 私だってね、こんな童顔じゃなかったら立派な大人の女やで！！」

「そそそそそつですよね」

「それと外で思いつ切り聞こえたんやけど、通報した市民を怒鳴る散らすとはどう言う事や！ それやから市民からの警察に対する信頼が薄くなんねん！」

「おおおおおおおお仰るとおりです！」

「そう言う事やから、上条当麻君は釈放。 それとこの事は上に伝えとくかな！」

「『エエエエエエエエエエ！ それだけはアアアアアアアアアア」

ア!」「」

上層部への報告という言葉に動揺を隠せない二人。

「それがイヤやったら、今後の態度を改めやアアアアアア!」

「は、はいイイイイイイイイ!」「」

上司に怒鳴なれ、二人は取調室を後にした。

「悪いな、はやて」

「なに、コレくらい当然や」

するとはやては、資料を見せる。

「シヤマルが司法解剖したんやけど、被害者はウィルスに感染したような痕跡があったらしいで」

「ウィルス?」

はやてのお陰で釈放された上条の元に、ルキアと士郎とアングがいた。

「大丈夫か？」

「重要参考人という形ですぐに出してくれたよ」

そう言つて四人は外に出た。

「それで、依頼はどうするんだ？」

「俺は降りない。目の前で依頼人が死んだんだ、引き下がれねえよ」

「上条………分かった。俺も手伝うよ」

「助かるよ」

こうして、四人は聞き込みに向かった。

「お待たせ」

フェイトとカフェで待ち合わせした四人は、彼女から情報を得る。

因みに彼女の職業はジャーナリストである。

「当麻に頼まれて、昨日の被害者の事を調べただけど……どうやら彼、ある不良チームの一員なの」

「成る程な、被害者の方にも非があるということか」

沈黙であったアंकがそう言った。

「それでね、一週間前に似たような事件が起きてたの」

そう言ってフェイトは資料の入った封筒を渡す。

「んじゃ、そのリーダーの名前は？」

「確か……黒田朋樹……だったかしら」

「言ってみるか」

「そいつ等が居そうな場所は？」

神都のとある酒場・ストームで黒田一味と対面する上条たち。

「ほう……万時屋さんが何の用だい？」

リーダーの黒田はそう言ってダーツを投げていた。

「あんた等の仲間の一人が殺されたのは？」

「知ってるけど」

「一週間前にも一人殺されたのも？」

「ああ」

「じゃあ、犯人が黒い車に乗っていたというのは？」

それを聞いた部下の今野は驚いた。

「黒い車！？ 黒田さんそれってまさかあの事故の事じゃ

」

今野が何かを言おうとしたが、黒田に殴られてしまっ。

「ガア！」

「やっぱあるみてえだな」

「おい、それ以上喋れば……」

黒田は銃口を向けるが、

「邪魔したな」

そう言っ上条たちは酒場を後にした。

外に出た上条たちは黒田一味が動くのを待った。

因みにルキアには黒田の見張りを頼んだ。

「動くか？」

「仲間を殴って黙らせるほどだ。相当動揺してるハズだ」

すると、黒田の部下である今野と金田はある場所へ向かっていた。

「本当に確認するのかよ」

「でも、黒田さんの慌てようは相当ですよ」

そう言っつて二人は駐車場に向かい、上条たちも尾行する。

そして十分後、今野と金田はシートを取り、隠されていた黒い車を見る。

「何ともないッスね」

しかし、その時であった。

黒い車が動き出したのだった。

「うあああああああああああ！」

すぐに逃げる二人であったが、金田は転んでしまつて車はそこを擦り抜けた。

「あ………が………」

金田は息絶えてしまった。

「わあああああああ！」

「止める！」

逃げる今野を救うために上条は車に飛び掛かる。

「早く逃げてください！」

そう言つて士郎は今野を逃がす。

「つてのわああああああ！」

跳びかかったのは良いが、すぐに振り落とされた上条であったが、

「バットショット！」

カメラ機能を持つコウモリ型ガジェット・バットショットを飛ばす。

「ユーノ！」

すぐさまダブルドライバーを装着した上条は、ジョーカーメモ리를構える。

【JOKER】

ユーノもサイクロンメモ리를構える。

【CYCLONE】

「「変身！」」

一方の士郎も、ベルトの溝にメダルを差し込む。

右から赤、黄、緑のメダルを差し込んだ後、スキャナーでスキャンする。

「変身！」

【CYCLONE・JOKER】

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

すると士郎は、鷹をイメージした赤い頭部に虎をイメージした黄色い腕部、そして飛蝗をイメージした緑の脚部を持つ、胸部のプレートにメダルの絵柄と同じ生物が描かれた戦士に変身する。

二人で一人の戦士・仮面ライダーWと、欲望の王『グリード』と戦う戦士・仮面ライダーオーズがここに光臨した。

「いくぞ！」

しかしその時であった。

「「うわ！」」

突如一人の怪人が、Wとオーズを襲撃する。

外見はクワガタのような頭部に螳螂の鎌のような装飾、そしてバッタのような脚部を持つ怪人である。

「ウヴァ！」

アंकはその怪人の名を呼ぶ。

彼こそ欲望の王・グリードの一人、ウヴァであった。

「久しぶりだな、アंक！」

「チツ、士郎！　まずはコイツを何とかするのが先だ！！」

「言われなくても、そのつもりだ！」

そう言つてオーズは、腕部のトラクローの専用武器・トラクローを展開してウヴァに斬りかかる。

「ハア！」

「フン、遅い！」

「グア！」

しかし、グリードは自分達が生み出す怪人・ヤミーとは違い、桁外れの戦闘力を持つ。

「クソッ！　アंक、蠍のメダルある？」

「あるぞ！」

アंकは蠍の絵柄が描かれた緑のメダルを投げ渡すと、受け取ったオーズは真ん中のメダルを替え、スキャンする。

【タカ・カマキリ・バツタ】

するとオーズの腕部が黄色から螳螂をイメージした緑色になり、胸部のプレートも真ん中が螳螂に変わる。

オーズは腕部のカマキリアームの専用武器・カマキリソードを構え、ウヴァに立ち向かう。

「ハア、タア！」

「何！？ 何だこの戦い方は！？」

基本形態・タトバコンボでの戦闘以上の戦い方を見せるオーズに驚きを隠せないウヴァ。

「ハッ！」

そしてオーズは、そのままウヴァを跳び越えると、そのまま今野の元へ向かう。

「オーズ！」

追いかけてよとするウヴァであったが、

「コツチを忘れんなよ！」

サイクロンメタルにチェンジしたWが、メタルメモリを専用武器・メタルシャフトのマキシマムスロットに差し込んだ。

【METAL MAXIMUMDRIVE】

その瞬間、メタルメモリが風を纏いだす。

「ハア！」

そのままWは、回転しながらウヴァをシャフトで殴り付けた。

「「メタルツイスター！」」

「グアアアアアア！」

攻撃を受けたウヴァの体からは彼等グリードの力の源であり、オズの変身の鍵となる硬貨・コアメダルが飛び出る。

「ハア！」

すぐさまアंकはそれをキャッチする。

「コイツは儲けたな」

そう言ってアंकはニヤリと笑う。

「クソッ、覚えてろ！」

そう言ってウヴァは姿を消した。

今野の元へ向かったオーズであったが、

「ぐあ！」

突如、蜘蛛のような怪人が現れ、彼を襲撃した。

「ヤミーか！」

グリードが人の欲望から生み出す怪人・ヤミーである。

クモヤミーは背中に生えてある四本の『爪』で攻撃を仕掛ける。

「うおっと！」

それを回避するオーズであるが、

「ウワアアアアアアアア！」

「しまった！」

今野が車に擦り抜ける光景を目にしてしまう。

「やった……」

クモヤミーはそう言って姿を消した。

「くそオ！」

目の前の命を救えなかったオーズは、アスファルトの地面を殴り付けたのであった。

事務所に戻った三人は、バットショットで撮った写真を現像させる。

「運転手の正体があったよ」

そう言ってユーノは、写真の青年の詳細を説明する。

「北川公平、大学二年生。彼には、事件と関わる重大な事が分かった」

「重大な事？」

「一週間前、彼のお姉さんがひき逃げ事故に遭っている」

「！？」

「成る程な、その事故の犯人が黒田とその一味って事か」

驚く上条と土郎とは対照的に、アंकは納得する。

「ああ、しかし証拠不十分で起訴されなかったそうだな」

「つまり公平さんは、お姉さんの復讐でドーパントになった」

「まさか一週間前の事件も彼の仕業……」

「“復讐心”か……ウヴァの奴め、人間の感情の中で恐ろしいものを『欲望』に選んだな」

「因みに彼のお姉さんの静子さんは、病院で今の意識不明だそうだな」

上条と土郎は、すぐさま事務所を後にした。

「“愛する者の復讐をしたい”……それも立派な欲望だからな」

そう言ってアंकも追い掛けて行った。

ある場所で北川公平は、呟いていた。

「姉さん、もうすぐだから」

「北川さんですよね？」

そう言つて上条と土郎、そしてアंकが現れた。

「何だよ、お前等？」

「万時屋です。あなたが今回のドーパント事件の犯人であることは既に分かっています」

「すぐに復讐を止めてくれませんか？ お姉さんも喜びませんよ」

説得に向かう二人であったが、

「お前等に……………何が分かる！」

そう言つて公平は走り出した。

「ハア……逆効果だったな」

それを見たアंकは呆れてしまう。

「あ、ちょっと!」

「西田さん。アイツに追い掛けられてるんです!」

偶然合った知り合いそう言ってバスに乗り込んだ公平。

「ちょっと!」

追い掛ける上条であるが、

「お前、彼に何するつもりだ!」

男に阻止されてしまう。

「離してくれ!」

抵抗する上条であるが、バスが走り出してしまい、

「あゝもう、不幸だあゝ」

そう言って頭を抱えてしまった。

「さつきは申し訳ない。 てっきり奴等の仲間かと思ってしまって」

「いえ、良いんですよ」

男の名は西田純一。

公平の姉・静子の婚約者である。

「美術大学の先生ですか？」

名刺を渡された土郎がそう言った。

「とは言っても、まだ駆け出しで……」

「つかぬ事を聞きますが、公平さんのお姉さん 静子さんとは何処で出会ったんですか？」

「行きつけの美術館で偶然出会って、そのまま彼女の優しさに惹かれました」

「それじゃ、静子さんが事故に会った時は？」

「勿論、悲しかったです。でも……」

「公平さんの方が、もっと悲しんでいた」

「当たり前です。ご両親を幼い頃に亡くした彼にとって、静子はたった一人の肉親ですから」

失礼と言って西田はその場を後にした。

すると、上条のスタックフォンが鳴り出し、

「もしもし？ ルキアか、今何処にいる？」

ルキアに場所を聞き出す上条。

『今、黒田を尾行していたのだが……あやつ、銃を手にしていてその先が見えんだ』

「場所は何処だ？」

『え〜と……亀田という看板が書かれた廃工場だ　　ってうわぁ！』

その瞬間、ドドドドドと銃声が鳴り出した。

「ルキア！？ クソ、衛宮さん」

「ああ！」

すると士郎とアークは、その場に会った自動販売機に銀色の硬貨・セルメダルを挿入し、真ん中の黒いボタンを押した。

その自販機は、バイク・ライドベンダーに変形した。

ライドベンダーに乗った土郎とアंक、そしてハードボイルダーに乗った上条は、そのままルキアの元へ向かった。

走行中、アंकは二人にこう言った。

「当麻、土郎。お前等に聞きたい事がある」

「ん？」

「今回の事件は、黒田って男の自業自得によるものだろ？世間の目で言えば、復讐をさせるのが良い手だと思わねえか？」

それを聞いた二人はこう言った。

「確かにそうかもしれない。だけど……どんな奴だろうと、目の

前の命を見捨てることは俺には出来ない」

「それに……復讐させたところで、公平さんの心が救われハズが無い」

その言葉を聞いたアंकは、

「フン、お前等本物のバカだぜ」

そう言って笑みを浮かべた。

そんな彼は、士郎をオーズにした時のことを思い出す。

完全な肉体になるために士郎を利用しようとするが、彼からの交換条件としてこう言われた。

（分かった、手伝ってやる。ただし条件として、俺が変身したい時に変身させる。命より、メダルを優先するな）

それを聞いた途端、アंकは心置きなくドライバーとメダルを士郎に渡した。

「（どうやら、俺も士郎の甘ちゃんに移っちゃったようだな）」

そう思いながら走行して行ったのであった。

黒田はマシンガンを容赦なく放つが弾切れになってしまい、追い掛けられるハメになってしまう。

「ヒイヒイヒイヒイ！」

追い詰められたまさにその時であった。

ドガンと壁を突き破ったWとオーズが現れたのであった。

「当麻……と誰だ？」

オーズの存在を知らないルキアは、オーズを始めてみることになる。

「何故邪魔をする！」

公平の問いにWは答える。

「大切な人を失った気持ちは俺にも分かる。だから、これ以上復讐をさせるわけにはいかないんだ！」

「まずはお前からだ！」

そう言って公平は標的をWに変えた。

クモヤミーも出現し、オーズはベンダーから降りる。

くオーズVSクモヤミーく

「ハア！」

トラクローを展開させたオーズは、クモヤミーの爪を防ぎながら攻撃する。

「シャアアアア！」

しかしクモヤミーは糸を吐き出し、オーズの動きを封じる。

「しまった！」

足を封じられたオーズであるが、

「士郎、コイツを使い！」

そう言ってアंकが鰻の描かれた青いメダルを投げる。

「サンキュー！」

受け取ったオーズは、真ん中を差し替えてスキャンした。

【タカ・ウナギ・バツタ】

ウナギの能力を宿す腕部・ウナギアームへと変わり、専用武器・ウナギウィップでクモヤミーを攻撃する。

「ガア！」

ウナギウィップから流れる電流でダメージを受けたクモヤミー。

「よし！ アंक、ライオンのメダル！」

「分かった！」

ライオンが描かれた黄色いメダルを鷹のメダルと差し替えてスキャンすると、

【ライオン・ウナギ・バツタ】

オーズの頭部がライオンの鬣をイメージした金色に変わった。

「ルキア、暫らくは目え瞑っとけ！」

「はあ？」

アंकの言葉に疑問を感じながらも目を瞑るルキア。
するとソレと同時に、

「ハアアアア……………タアアアアアア！」

突如オーズの頭部から高熱の光が放たれ、

「グアアアアア！」

足を封じていた糸も一瞬で吹き飛び、クモヤミーも視覚を封じられてしまう。

「今だ！」

そうやってオーズは鷹のメダルと虎のメダル、そしてバツタのメダルを差し込み、基本形態・タトバコンボに戻った。

【タカ・トラ・バツタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

さらにオーズは、ベルトのメダルをそのままスキャンした。

【スキャンニングチャージ】

するとバツタの形状となった脚部で上空へと飛び上がり、同時に出現したリングを潜るようにドロップキックの要領で放つ必殺技・タトバキックを叩き込んだ。

「セイヤアアアアア！」

「グアアアアアアアア！」

クモヤミーは爆発し、セルメダルへと変わり、

「メダルメダル」

それを嬉しそうに手に取るアंकであった。

〜WVS謎のドーパント〜

バイクと車……二台のマシンが一直線に走り出す。

しかし、Wはその瞬間にメタルメモリを差し込む。

【CYCLONE・METAL】

メタルメモリの防御力を利用し、車をひっくり返したWであったが、

「ヒィ！」

「逃がすものかアアアアアアア！」

逃げ出す黒田を追いかけようと、公平は車ごと起き上がった。

「マジかよ！」

Wはその光景を見て驚きを隠せなかった。

外に出た黒田を追いかけようとした公平の車であったが、Wが予め呼んだリボルギャリーが吹き飛ばした。

しかし車はと待つ事を知らず、Wは展開したりボルギャリーに移動し、ハードボイルダーの空中移動形態・ハードピューターで空へと飛んだ。

「あの車に当たったら奴は、ウィルスに感染しちまう……そうすれば俺も………」

一瞬考える上条であるが、ユーノがこう言った。

「当麻君、キミなら大丈夫だ」

「何でだよ？」

「キミには『右手』がある」

「あ、そうか」

そう言つてハードピユーターを車に向かつて急降下させながら、

【HEAT・METAL】

ヒートメタルにチェンジし、メタルシャフトのマキシマムスロットにメタルメモリを差し込んだ。

【METAL MAXIMUMDRIVE】

シャフトの両端から炎を噴出しながら急降下し、必殺技を叩き込んだ。

「メタルブランディング！」

「ゲアアアアアアアアアア！」

攻撃を受けた車から公平は放り出され、車は爆発した。

〈第三者パート〉

炎上する車を見ながら、ユーノはこう言った。

「ドーパントを検索した結果、ウィルスは熱に弱い。その可能性に賭けてみたんだ」

「それでヒートか……流石相棒」

すると、逃げていた黒田は高笑いをしながらWを見る。

「アリガトな。誰だか知らないけど」

すると、ルキアとアंकに殴られてしまう。

「んが！」

それを見ながら苦笑してしまう土郎。

三人が駆け寄り、ルキアはWにこう言った。

「結局、助けたのだな」

「ああ」

しかし、土郎がある事に気付いた。

「なあ、メモリブレイクしたはずなのに、メモリが出てこないぞ？」

「え!?!」

「何だと!?!」

「ドーパントは公平さんじゃなかったのか!?!」

驚くWとルキアであるが、突如アंकが叫んだ。

「チツ! どうやら、まだ終わりじゃねえようだ!」

「「「「え?」「」「」

アंकの言葉で全員が振り返ると、

「アアアアアアア!」

叫び声のような声で鳴く虫のような異形・バイラズドーパントがいた。

「ドーパント!?!」

これにはWも驚きを隠せなかった。

第19話：Vの呪い／復讐心と怨霊車とメダルのライダー（後書き）

次回、Vの呪い／怨念獣と復讐と怒りの鉄拳

第20話：Vの呪い／怨念獣と復讐と怒りの鉄拳（前書き）

仮面ライダーW（another world story）、前回の三つの出来事。

一つ…：上条当麻の目の前で、依頼人が殺される。

二つ…：Wとオーズは、復讐車とヤミーを撃破。

そして三つ…：W達の前に、ドーパントが現れた。

第20話：Vの呪い／怨念獣と復讐と怒りの鉄拳

「アアアアアアアア！」

「どうなつてんだよ!?!」

突如現れたドーパントに驚きながらも、ルナメタルにチェンジする。

【LUNAR・METAL】

鞭と化したメタルシャフトでドーパントを攻撃するが、

「ハアアアアアアア！」

バイラズドーパントは触手で反撃する。

「グアア！」

その瞬間、バイラズドーパントは触手で黒田を捕らえ、

「ウワアアアアアア！」

そのまま彼を殺害したあと、そのまま姿を消した。

「逃げられた！」

「どうしたんだい当麻君。動きが鈍くなっただけど？」

それを聞いた上条は、変身を解除しながらこう言った。

「分からない……けど、俺にはあのドーパントが……悲しんでる
ようにしか見えなかった」

Vの呪い / 怨念獣と復讐と怒りの鉄拳

インデックスの風邪の治り、一安心の一同。

そして全員が、顔を見合わせたのであった。

「まずは状況を整理しよう」

士郎がそう言うと、全員がコクリと首を縦に振った。

「まず、全ての発端は一週間前の事故から始まった」

「被害者・北川静子さんの弟の公平さんは、復讐のために黒田一味を殺害した」

「だけど、公平さんからメモリが出現せず、ドーパントも別にいた」

「他に公平さん以外で、静子さんの復讐をしたがってる人物は……」

「婚約者の西田純」

「行って見よう！」

上条はそう言って事務所を後にした。

「俺達は情報収集だ。アंक、セイバー」

「ああ」

「分かりました」

そう言って土郎とセイバー、そしてアングの三人も事務所を後にした。

その時、ルキアはこう呟いた。

「1」の話……我々の出番が無いのでは？」

とある美術教室。

生徒にデッサンの指導をしていた西田。

しかし、その時であった。

「アアアアアアアアアアア！」

バイラズドーパントが出現したのだ。

「キヤアアアアアア！」

「ウワアアアアアア！」

生徒達は悲鳴を上げながら逃げ出し、西田も逃げようとするが、足が躓いて転んでしまう。

「ヒィ！」

怯える西田であったが、

「止める！」

間一髪で上条が登場した。

西田が逃げたのを確認した上条はダブルドライバーを装着する。

「ユーノ！」

【JOKER】

事務所に居るユーノもドライバーを通じて状況を把握する。

「これは予想外だ。西田さんはドーパントの疑いが掛かっているところか、命を狙われる立場になっている」

「何だと!？」

それを聞いた一同も驚きを隠せなかった。

【CYCLONE】

「変身!」

【CYCLONE・JOKER】

仮面ライダーWに変身して、バイラスドーパントに跳びかかった。

「オラア!」

「アアアアアアア!」

しかしバイラスドーパントは、すぐさま姿を消した。

「またかよ!」

そう思いながら変身を解除した上条であった。

スタグフォンで事務所に連絡する上条は、これまで得た情報を話し出す。

『フェイトや青髪から聞いた情報だと、北川姉弟は公平さんが幼い頃に両親を亡くして、暫らくは親戚の家に引き取られていたんだけど、その親戚も公平さんが高校卒業と同時に亡くなってるだから事故に遭う前は二人は一緒にアパート住まいだったらしいんだ』

「じゃあ……あのドーパントは一体………」

「もしかして……ひき逃げされた本人かな？」

スバルがそう言うと恋次が呆れながらこう言った。

「あのなあ、その静子って女は事故で意識不明の重体になってんだぞ？ 仮に彼女が犯人だとしても、どうやってドーパントになれんだよ？ 何で婚約者を殺そうとするんだよ？」

「う……そ……それは………」

質問責めを受け、涙目になるスバルであったが、

「『それだ！』」

上条とユ一ノは何か気付いたのであった。

「え？」

「スバル、キミ天才だよ！」

「え、ホントですか！」

神都にある総合病院。

そこに入院している北川静子の病室に向かったユーノ達一同。

するとすぐにユーノはあるモノを捜していた。

「ゆ、ユーノさん!？」

「何やってるんですか!？」

慌てる四人であるが、インデックスが彼女の右腕に何かがあるのを見つける。

「あつたんだよ!」

「何だ、その変な刺青は？」

まるで電子回路のような四角い刺青に疑問を感じる恋次。

「これは生態コネクタと言って、ガイアメモリの所有者がドーパントに変身するために必要なモノで、メモリが力を引き出す『鍵』なら、このコネクタは『錠』の役割だ」

「へえ〜」

「というか、以前その話を説明したよね？」

「え、そうだったっけ？」

「しましたよ」

「同じく」

「え？」

ユーノの言葉に続くように、スバルもティアナも頷くと、ルキアが呆れながらこう言った。

「忘れたのも無理も無い。勉強に関しては全くダメな貴様のことだ、どうせ途中で居眠りなどして説明を聞きそびれたんだろう」

「う／＼／＼」

凶星を疲れた恋次は顔を真っ赤にしてしまう。

「でも、何で静子さんが婚約者？」

アトリが疑問に思うが、

「それについては説明してやる」

そう言ってアंकとセイバーが現れた。

「アंकにセイバーさん？」

「どつ言つことだ？」

アंकとセイバーは、知ってる情報をメンバーに話した。

「あのニシダという男、相当な女垂らしのようです」

「女垂らし!?!?」

それを聞いた恋次は驚いてしまう。

「ええ。絵のモデルになる女性を捜しては、その女性に手を出すらしいのです」

「しかもソイツ、同時に結婚詐欺まで働いてたらしい」

「結婚詐欺!?!」

するとセイバーは、ベッドの上の静子を見ながらこう言った。

「恐らく、彼女もその被害者でしょう」

「てこたあ、西田を狙っていた動機は……」

「自分を詐欺の標的にした復讐」

「本来なら西田って男に自業自得って言いたいところだが、そんな事を言ってる場合じゃないようだな」

そう言っただけで、静子の額に指を置くと、何かを探り出した。

「何やってんだ?」

「アंकは今、彼女がドーパントになった経緯を知るために、過去の情報を探っているのです」

「アイツそんな事出来る!?!」

これには恋次達四人は驚いた。

情報を得たアंकは指を離し、全員にこう言った。

「どうやら、轢かれる寸前にメモリを使ったようだぜ」

「そうか、では我々が見たドーパントは……………彼女の思念が生み出した存在」

「ああ、言わば“怨念獣”だ」

それを聞いた全員がゾツと背筋を凍らせた。

しかしユーノは、決心した顔でこう言い出した。

「なら、説得してみせるよ」

「出来るワケねえだろ！ 眠ってる、しかも精神だけがどっか行っただ人間にどう声を掛けるんだよ！？」

恋次がそう言うと、ユーノはサラッとこう言った。

「僕の『ワイルドスマン賢者』なら、今の彼女と精神に潜り込んでコンタクトが出来るよ」

「マジで！？」

「ユーノ、お願い！」

こうしてユーノは、生態コネクタを通して、北川静子の精神世界に潜り込んだ。

精神世界に入ったユーノは、一人の女性を見つける。

それは、ボロボロで黒く汚れたドレスに身を包んだ北川静子の姿であつた。

「北川静子さんですね？」

「アナタは？」

「アナタを救いたいと思っている人物がいます。僕はその代理人で来たんだ」

「私を……救う？」

「そうです。一つ聞きたいのですが、何故ガイアメモリに手を出したんですか？」

ユーノの質問に、静子はこう言った。

「最初彼と出会い、結婚も間近に迫ったとき……私は知ってしまったの……彼の本当の姿を……」

一週間前のあの日、静子が西田が自分以外の女性に手を出していた場面を目撃した。

すると、ガイアメモリの売人がメモリの入ったアタッシュケースを見せた。

(宜しければ、好きなメモリをどうぞ)

「最初は懲らしめるつもりで買った。でも弟と一からやり直そうと戸惑ってしまった……でも、その時だったの。あの事故に遭ったのは」

轢かれる寸前、彼女を生態コネクタにメモリを差し込んでしまう。

(【バイラス】)

「だから私は復讐を決意したの。最初は私を轢き逃げした黒田達……そしてあの男よ！」

「もう止めてください！ これ以上アナタに罪を重ねて欲しくない！」

説得を試みるユーノであったが、

「貴方達の気持ちは嬉しい……でも、私には復讐しかないのよ!!」

その威圧により、ユーノは精神世界から消えてしまう。

「ウワツ！」

現実世界に戻ったユーノは、吹き飛ばされてしまう。

「ユーノ！」

「ダメだ！ メモリの力と憎しみが強すぎて、説得が出来ない！」

憎しみに捕らわれた彼女を救うことは唯一つであった。

「戦うしかない」

士郎から西田の情報を知った上条は、すぐさま彼を探し出す。

「あのヤロウ……優しそうな面して、小汚ねえ野郎だったのかよ！」

そう呟きながら上条は、ある場所に着いた。

「ここか……」

それは西田のマンションであった。

しかし、その時であった。

「ウワアアアアアアア！」

西田が悲鳴を上げながら走り出したのだ。

「何だ!？」

走り疲れた西田が見たのは、ある教会に着いた。

それは静子を騙した際に、彼女を本気にさせた場所。

すると、そこから死人のような顔で静子が現れた。

「し……静子！」

「裏切り者」

そう言っただけで彼女の思念は、バイラスドーパントへと変わった。

西田を追って教会に着いた上条は、ダブルドライバーを装着する。

「止めるぞ、俺達が！」

【JOKER】

「ああ、そうだね！」

【CYCLONE】

「「変身！」」

【JOKER・CYCLONE】

仮面ライダーWは、バイラスドーパントに跳びかかった。

「オラア！」

【HEAT・TRIGGER】

「俺達に……出来る事は………」

すぐさまトリガーマグナムのマキシマムスロットにトリガーマモリを差し込んだ。

【TRIGGER MAXIMUMDRIVE】

「トリガー……エクスポージョン！」

その瞬間、Wはトリガーマグナムをバイラズドーパントに向ける。

それを見たオーズは、すぐに跳び上がり、同時にマグナムの銃口から炎が火炎放射のように放たれた。

「グアアアアアアアアアアア！」

バイラズドーパントは消滅し、病室で寝ている静子の体から排出されたメモリも砕けた。

「は……ハハハハハ、ざまーみる化物め！」

西田は本性を見せながら笑うが、

「さあ、その幻想をぶち殺す」

「え？」

振り返ると同時に上条に殴られた。

「ガア！ 何しやがる！！」

「自業自得だ！」

「その通りだ」

すると土方が現れる。

「西田純一。結婚詐欺の容疑で逮捕する！」

こうして、西田は真選組に逮捕されたのであった。

「今でも静子さんは意識不明なのか？」

「ああ、皮肉だね……本当の被害者が加害者になるなんて……」

「……そうだな」

コーヒーを飲みながら、上条は悲しい顔をする。

そんな上条は、あることを思い出した。

「そう言えば……結婚の話なんだけど……」

「へ？」

「ユーノ……お前、なのはと結婚するんだろ？」

それを言われたユーノは、顔を真っ赤にした。

「なななななな何でそれを！？／＼／＼／＼」

「桃子さんから聞いた」

結婚の話を知られ、一瞬気絶しそうになったユーノであった。

第20話：Vの呪い／怨念獣と復讐と怒りの鉄拳（後書き）

次回、Yの結婚／鳥ヤミー出現！

虎龍

「次回は重要大事さんの『ユーノ・スクライア外伝・絆』とコラボです」

第21話：Yの結婚／鳥ヤミー出現！（前書き）

重要大事さんとのコラボです。

第21話：Yの結婚／鳥ヤミー出現！

三日後になのはとユーノの結婚式が開かれる。

そんな二人は二人は、婚姻届を提出していた。

その籍を書く欄には、『なのは・スクライア』と『ユーノ・スクライア』と書かれていた。

そんな二人を覗いていたなのはの父・士朗と兄・恭也は、ドス黒いオーラを放っていた。

「「おお〜のお〜れえ〜!!!」」

しかし二人は知らなかった。

この嫉妬と殺意がとんでもない悲劇を招いてしまう事を。

「その欲望、解放してやるよ」

Yの結婚／鳥ヤミー出現！

神都にある屋敷・衛宮邸。

その家主である衛宮士郎は、屋敷内の道場で竹刀を振るっていた。

「フンッ！ フンッ！」

根っからの努力家と呼ぶべきその姿は、正義を貫こうとする戦士の目であった。

「……………」

屋敷の屋根の上に座る青年・グリードのアンク。

彼は目の前の光景をずっと観ていた。

すると、下から声が聞こえた。

「アंक！」

「ん？」

下を見ると、士朗とセイバーの二人が手を振っていた。

「今から『翠屋』に行くんだけど、お前も来るか？」

「ああ、そうする」

そう言って屋根から降りたアंकは、二人と共に屋敷を後にした。

しかし、その時であった。

チャリン　という音が、彼の耳元で聞こえた。

「士朗、ヤミーだ！」

「え、いきなり!？」

「行ってみましょう!」

そう言って士朗とセイバー、そしてアंकはヤミーの気配がする方向へ向かった。

その同時刻、四人と一匹がこの街にやって来たのであった。

「賑やかな街だね」

「そうだな」

「モモタロス、浮かれないようにね」

「ナーノの言うとおりだよ、先輩」

「何でそうなるんだよ！」

『ユーノ・スクライア外伝』シリーズの主人公のユーノ・スクライアから順に、ワケあってフェレットの姿になっている時空管理局創造主及び元帥のユーノス・スレイア、未来からやって来たユーノの息子のナーノ・T・スクライア、ユーノが店主を務める店『スクライア商店』の店員・浦太郎と鬼太郎がそう言った。

彼等は嘗てのユーノスに封印され、ミッドチルダに復活した『欲望の王』の呼ばれる怪人・グリードの作り上げる怪人・ヤミーを倒すと同時に、アングルモアの回収のためにこの世界にやって来た。

すると、ユーノスの耳元で硬貨が落ちるような音が聞こえた。

「ユーノ、ヤミーだ！」

「何処ですか！」

「すぐ近くだ！」

そう言ってユーノ達は真つ先に気配のする方へ向かった。

ユーノ達が向かった先は、森の中であった。

「お父さん、アレ！」

「!?!」

ナーノが指差す先には、

「ヤミー！」

カラスのようなヤミーと、孔雀のようなヤミーの二体がいた。

さらにその足元には、青年が倒れていた。

「ユーノ……スクライア……倒す」

「殺す！」

「な!？」

カラスヤミーとクジャクヤミーはそう言って、ユーノに襲い掛かった。

「変身！」

【Slayer mode】

ユーノは完現術フルプリンクによる変身・スレイアーモードになり、ヤミーに立ち向かった。

「変身！」

【GUN FORM】

ナーノもまた、バリアジャケットを装着し、父と共に立ち向かった。

「こりゃ見ものだな」

そんな二人の戦いを見ていたは、異形と化した右前腕部が特徴の金髪の青年。

彼こそ、ミッドチルダの怪人・グリードのアंकであった。

「アंक！」

ユーノから鬼太郎の肩に乗り替わったユーノスは、アंकを睨みつける。

「そう怖い顔で見るなよ」

「ふざけてるのか！」

アंकの言葉にユーノスは怒りを見せるが、その時であった。

「ほう……面白い展開になったな」

「!?!」

聞き覚えのある声を聞いた全員が、声のする方へ顔を向けた。

そこ似たのは、異形と化した右前腕部が特徴の金髪の青年・アंकであった。

「バカな……俺がもう一人だと!?!」

アंक自身もコレに驚きだす。

すると、金髪の少女と赤銅色の髪の青年が現れる。

「アंक……これは一体!？」

「鳥のヤミーか!？」

この二人はアंकが二人いる事と鳥のヤミーがいることに驚きを隠せない様子であった。

「とりあえず“アイツ”から話を聞いてみるか　とその前に、まずはヤミーだ。　士朗!」

「ああ」

士朗と呼ばれた青年は、ベルトの溝にコアメダルを差し込み、それをスキャンすると、

「変身!」

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

赤い鷹の頭部に黄色い虎の腕部、そして緑色の飛蝗の脚部の戦士に変身した。

「何だそりゃ!？」

鬼太郎が驚くと、青年は自らをこう呼んだ。

「衛宮士郎……またの名を、仮面ライダーオーズ!」

遂に、メダルの戦士と絆の完現術士が出会ったのであった。

「ハア！」

オーズはカラスヤミーを攻撃すると、

「セイヤア！」

今度はクジャクヤミーを攻撃する。

「士朗！ 奴等が飛ぶ前に、羽を切り落とせ！！！」

「了解！」

アングの指示を受けたオーズは、真ん中と左端のメダルを取り替えた。

【タカ・カマキリ・チーター】

タカキリーターにチェンジしたオーズは、すぐさまベルトをスキヤ

ンした。

【SCANNING CHARGE】

「ハアアアアアアア……………」

オーズは、チーターレッグの高速移動から同時に出現したリングを
潜りながら、

「セイヤアアアアアアア！」

カマキリソードでカラスヤミーの羽を切り落とした。

「ガアアア！」

翼を失ったカラスヤミーはもう上空へ逃げる事ができなくなった。

「よし、僕も！」

そう言ってユーノも続くように、カラスヤミーに止めを刺した。

「セイヤアアアアアアア！」

「グアアアアアアアア！」

カラスヤミーは爆発と同時にセルメダルとなり、クジャクヤミーは
その場から上空へ逃げ去った。

「チツ！」

無論、『アंक』もその場を後にした。

「逃げられたか……」

アंकは呟きながら、もう一人の自分が逃げたのを確認した。

「大丈夫ですか？」

そう言つて士朗が倒れていた青年に近づくと、彼は驚きを隠せなくなる。

「な………ユーノさん!？」

それは紛れも無く、ユーノ・スクライア本人であった。

病院に運び込まれたユーノは、直ちに緊急治療を受けた。

救急車が来るまで、士朗やナーノが適切な処置を行ったため、大事

には至らなかつたが、意識不明の重体であつた。

「あ……………あああああああああ！」

婚約者の姿になのはは涙を流した。

相棒である上条も、血が滲むくらい拳を握り締めた。

それを見届ける事しかできない士朗。

「また……………助けられなかつた」

自分の無力さを悔やみながら、彼は前へと進んだのであつた。

衛宮邸では、ユーノ達の話聞いていたセイバーとアング。

「成る程、貴方がたはそのアンモルゴアを回収するために？」

「そうです。一刻も早く回収しないといけないんです」

そんな一同の中で、無言であったアंकが口を開いた。

「それにしても、引っ掛かる点が一つだけある」

「引っ掛かる？」

そう言つてナーノがアंकの言葉に耳を傾けるも、鬼太郎が止めた。

「何考えてんだよテムエは！」

「何が？」

「何がって、相手はアंकだぞ!？」

「でも彼はこの世界のアंकであつて、僕等の知ってるアंकじゃないし」

「そりゃ、そうだけどよ……………」

「それで、引っ掛かる点って？」

ナーノの言葉にアंकはこう言った。

「ヤミーだ。本来奴等は『親』の欲望から生み出される。違う

『親』で同じ相手を狙うヤミーは初めてのケースだ」

それを聞いた一同は頭を悩ませるが、ナーノはサラッとこう言った。

「それってタダ単に…………『親』にされた人の欲望が同じか、もしくは似たようなものだからじゃないの？」

「あ……」

それを聞いた一同は成る程という顔をする。

「確かに、そう考えもあるな。アイツ……俺のクセに随分考え
じゃねえか」

「ややこしい言い方ですね」

アングの台詞にセイバーは溜め息混じりにそう言った。

「そうか……だとすれば……」

するとアングは携帯電話を掛けた。

電話の相手は士朗である。

「士朗！ ヤミーの親が分かった！！」

翠屋に向かった士朗は、中に入る。

「いらっしやい。おや衛宮君」

「どうした、衛宮？ そんなに慌てて」

高町士朗と恭也が迎えてくれた。

高町家の人々は、名前が同じであるために衛宮士朗のことは苗字で呼んでいる。

「二人とも……時間開いてますか？」

「ん？」

士朗は、二人にこう言い放った。

「俺にもう一度、剣を……御神流を教えてください！」

お辞儀をする士朗に、

「ああ、構わないよ？」

「先に道場へ待っていてくれ」

そう言って二人は背を向けた。

その背中を見ながら士朗は心の中で呟いた。

「（ウソであって欲しい……高町さんと恭也さんが……二人が……ヤミーの『親』だなんて……）」

アंकから残酷な真実を告げられながらも、二人の剣術の師の背中を見ていた土朗であった。

第21話：Yの結婚／鳥ヤミー出現！（後書き）

次回、Yの結婚／士郎の正義と復活のコンビと不死鳥コンボ

〈キャラ紹介〉

衛宮士郎／仮面ライダーオーズ

年齢：19歳

登場作品：Fateシリーズ

能力：投影術^{トレイス}

属性：魔術系特殊者^{マジックアビリティ}

ランク：D

設定：実家の土蔵で発見したオーズドライバー及びコアメダルを手にした事によって、グリードとヤミーとの戦い人の欲望の深さを体験する事になる。

幼い頃の自分を救ってくれた養父権恩人のような人間になるために、災害ボランテアに精を費やしている。

アंकとは彼の願いを叶える条件として“人命を優先”させている。能力のランクはDであるが、彼の覚悟の強さでSに跳ね上がる事もある

高町家の剣術『小太刀御神二刀流』を教わっているため、双剣を使った攻撃は得意。

オーズに変身した時も、「二刀流が使える」という理由でカマキリ

アームを好んで使用する。

セイバー

年齢：19歳（外見上）

登場作品：Fateシリーズ

能力：不可思議インヒジブル

属性：魔術系特殊者マジックアビリティ

ランク：A

設定：士郎のパートナー。

真面目な性格であるため融通利かないこともある。

食欲はインデックスやアトリに勝るも劣らない胃袋を持つ。

剣術の腕も高く、士郎の鍛錬の相手にもなることもしばしば。

アング

年齢：19歳（外見上）

登場作品：仮面ライダーオーズ

能力：火炎能力

属性：なし

ランク：S（人間に合わせているときはBに下げている）

設定：800年の眠りから覚めたグリードの一人。
完全な身体を手に入れるために士郎を利用するが、本人が心置きなく了解した。

また、彼からの交換条件として“人命を優先”にしている。
士郎のお人好しさには呆れているが、その魅力に徐々に惹かれてい
る部分があり、彼やセイバーを心配する事もある。

そのためか、人間の進化の可能性に期待を求めたりする。
たまにボケることもある。

アイスクャンディーが好物で、翠屋のアイスクャンディーはその中
でもお気に入りである。

原作とは違い、最初から怪人態に変身できる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2193x/>

仮面ライダーW ~ another world story ~

2011年10月25日02時03分発行